

---

# ネクロマンサー奔走記

闇谷 紅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ネクロマンサー奔走記

### 【Nコード】

N5322S

### 【作者名】

闇谷 紅

### 【あらすじ】

戦乱により荒れた世界に強大な力を持つ二人の存在が出現した。一人は自身を戦乙女と称する自称下級神の少女。一人は自身を冥王と名乗り神にも迫らんとする力を持った死霊術師。チート級の力を持った二人はどこから来て何を目的としているのか。二つの力が荒れ果てた世界を変えて行く。

※…神によってチート能力を貰った地球出身の主人公が、異世界平和に奔走するお話です。おそらく不定期更新（未完の執筆中作品が

あればそちらを優先させます)。プロローグのみ三人称、本編一人称視点の予定。

## プロローグ

「あなたは……?」

村の入り口に立つ奇妙な来訪者に気づき、誰何の声を上げたのはどこかやつれた表情の女性だった。

「ここはローウェ村で間違いないかな?」

「は、はあ」

戦装束に身を包む少女は気がつけばそこにいて、いつの間に現れたのかと驚きながらも頷く。少女の後ろで村の入り口にある茂みが微かに音を立てたことにも茂みからすり切れたローブの端が見えている事にも驚きのあまり気づかない――だが、女性が驚倒するのはここからだった。

「来たれ、勇者達よ!」

「ひっ」

少女が大仰な動作で祈りを捧げると同時に何もなかった周囲の間から次々に人が現れる。同時にガチャガチャと金属音が立つのは出現した者達全員が武装をしていたからだった。目撃した女性からすればたまったものではない。常軌を逸した出来事に思わず身をすくませ。

「え、あ……」

現れた者の一人に目を止めて口をぽかんと開けたまま固まる。

「すまない、エリィ」

「あなた!」

硬直は一瞬、弾かれたように女性は一人の男へ駆け寄ると抱きついた。

「ご主人でしたか」

「はい、ひょっとしてあなたがわざわざ?      ありがとうございます」

……主人は戦場で戦死したと」

「ううん、お礼なんて言わない方が良いと思うよ。後悔するから」  
鎧に包まれた夫の身体を抱きしめながら涙を流しつつ礼を言う女性に少女は頭を振ると、自分は戦乙女であると語った。

「戦乙女？」

「そう、戦死した勇敢な戦士を次なる戦いに導く者。下級神なんだけどメジャーな神様だと死神が一番近いかな」

「死神……！」

女性の訝しげな顔が恐怖に浸食され、少女は嘆息しつつ女性から少し距離をとる。

「ああ、大丈夫。エリィさんを殺しに来たとかそう言う訳じゃないから。ご主人とかこの村出身の皆さんが家族に会いたいって願ったから連れてきたんだよ」

「そう言うことなんだ。お前には俺を連れ去ろうとする悪神に見えるかも知れないが、こうしてお前を抱きしめられるのも……」

「嘘！ あなたは生きてるじゃない、触れられるじゃ」

「エリィ」

男はくっつかかる妻の手を取ると自分の頬に触れさせた。

「冷たいだろう？ そう言うことなんだ」

崩れ落ちる女性の姿を横目に少女は再びため息をつく。

「さてと」

エリィと呼ばれていた女性が騒いだためか、村の入り口にはいつの間にか人が集まり始めていた。中には少女の連れてきた男達に見覚えがある者も居るのか驚く者があり、へたり込む者が居て、エリィのように駆け寄ろうとしている者も居た。

「えーと……お集まりの皆さん、ボクは――」

一人目と同じ対応をしていたら身体が足りないと少女は判断したのだろう。エリィの反応を見て少女は戦死した男達が家族と対面を果たす為に同行してきた死神のようなものだとかと大声で名乗った。生きていると勘違いしたままでは残酷だと思ったからだ。だが。

「ひゃあああつ！」

「助けてくれええつ！」

世の中には人の話を聞かない者が多い。もちろん、突然やってきて神を名乗る方が変人呼ばわりされても不思議ではないのだが、村へ事前に届けられた戦死者リストに名が連ねられている男達を連れて現れたのだ。半端に理解して混乱する者が居ても無理はない。

「あー、えっと……あの人達はひとまず置いておいて、残った人達との対面から始めようか？」

何とも言えない顔をしていた男達の中で何人かが頷き。

「父さん」

頷いた男の一人が惚けたように立っている白髪交じりの男に目をとめ歩き出す。

「お前、やはり……」

「すまねえな、父さん」

絶望と衝撃と驚愕の三つに打ちのめされ、言葉を失った父親にばつの悪そうな顔で頭をかきつつ、息子が詫びる。

「ひでえ戦場だったよ。……死んだ奴は敵味方関係なくあそこの戦女神様に声をかけられて三つある選択肢から一つを選んだ。昇天するか、戦女神様とともに行く道をとるか、条件付きで前の二つのどちらかを選ぶか」

「そして、息子さんは三つ目の選択肢を選んだんだよ」

翳りのある笑みを浮かべつつ指を立ててゆく息子の横にやってきたのは一人の少女。

「三つ目」

「そう、条件付きの。お父さんに会いたい、あつて話がしたいってね」

少女は肩をすくめると、悪戯っぽく笑って指を立てた。

「親子水入らずの時間は設けるからごゆっくり。それで、話し終えただけど、昇天でいいんだよね？」

「ああ、戦場に出て思ったが俺は戦いにゃ向いてねえ。父さんに会

わけてくれた事には感謝するが一緒に行っても役に立つどころか足手まといになりそうだしな」

それだけ聞けば充分だったのだろう。

「じゃあ、今から水入らずタイムってことで。他の村も回らなきゃいけないからボクは行くけど、明日の今頃までには戻ってくるから、そこがタイムリミットね」

集合時間に遅れないように、と言い残して少女は歩き出し。

「じゃ、ごゆっくりー」

神と名乗った者には思えぬほどの気安さのまま村の入り口で姿を消した。

「消えた？」

「やはり神様なのか……」

「そうでなきゃ、俺がここにいられるかよ」

ざわめく村人達は気づかない、少女が居なくなると同時に茂みから除いていたローブの端も消えていたということに。

## 第一話「神との邂逅」

その人に褒められたかった。自分を信じてくれていたから、信用に応えなかった。

「だから、今——惰性で生きて居るんだろうな」

目標を失ってしまえば、世界は色あせて見える。誤魔化すように現実逃避をしても、結局のところ現実から逃げ切れないのだ。——だから。

「貴方に救って頂きたいのです」

アニメ影像であればまるでバックの手抜きとしか思えない真っ白な空間で出会った女性の言葉は魅力的だった。

「女神？」

「はい、いくつも点在する世界——あなた方の文明レベルなら惑星といったほうがしっくり来るかも知れませんが、私はその三つを総括して見守る立場にあるものです」

ギリシア神話の神々に似た衣装を纏った自称女神は僕へ一つ依頼をした。

「実は私の管轄する世界の一つが戦乱により荒廃しているのですが、貴方にはこの戦乱を治めて頂きたいのです」

普通に考えれば無理なお願いだった。人生の目標を見失い、惰性で生き始めてかなりの年月を得ている。

「もっと若い、心身共に優れた人に頼むべきなのではないですか？」  
身体もなまって身体機能も落ちているだろうし、老いも自覚している。

「いいえ、心配には及びません」

だが、自嘲気味に口にした僕の言葉に女神は頭を振る。



「立場上私はおおっぴらに世界へ干渉することを認められてはおりません。ただし、救済措置として力を分け与えた異邦人を送り込むことだけは許可されております」

「力を？」

「はい。何も与えず身体一つで世界を救ってこいなどという無茶を要求していたと思われたなら少々悲しいです」

実際少し悲しそうに視線を落とし女神は嘆息する。

「超人的な力の一つや二つ与えられても結局のところ大切な人一人守れずうちひしがれる英雄を私は何人も見てきました」

「だったら、力を与えられたところで僕に戦乱を治めることなどできないのでは？」

女神の言葉は補助するぐらいは当然という意味なのだろうが、僕にとってはハードルをあげられたようにしか見えなかった。

「大丈夫。貴方は自分の能力を低く見積もりすぎですし、今回私は貴方に三つの力を与えた上で身体能力を向上させるつもりで居ます」  
「三つ？」

「はい。貴方の事を知った上で、貴方に相応しい力を三つ差し上げます。過去の事例をふまえての特例です」

つまり、いままで一つや二つでダメだったから三つと言うことなのだろう。安直な気もするが、そもそも授けてくれるという力はどれほどのものなのか。

「基本的に私達は自身の力量を超えないレベルであれば、ほぼ無制限の力を人に授けることが出来ます」

こちらの思っていたことを察したのだろう。女神は僕の疑問に答える形で説明を始めた。

「これは、本来ならば神が交代する時に、次代の神へ力を継承する為のシステムを流用したもののなのです。ですから、私達は貴方が望むなら貴方を神にすることも出来ます」

「ただし、神にしてしまうと世界への干渉が出来なくなる為に今は君を神に出来ない」

女神の言葉を補足するように会話に加わってきたのは、豎琴を抱えた優男。この人物も神なのだろう。

「自称で名乗る分には構わないけどね。君が僕達の願いを聞いてくれるなら、文句を言う者はここには居ないと思うよ」

「その通りです。ただし、彼の言った制約がありますから、貴方に授けられる力は神一人分より小さなモノとなります」

「その条件下では最高の力を君は手にする。得る力の種類にもよるだろうけれど、自身の若返りや肉体強化ぐらいなら朝飯前の筈だよ」

「どうやら、かなりの優遇措置らしい。これで年齢や身体機能も気にしなくて良いのかも知れない。」

「では、聞きましょう。私達の申し出を受けてくださいますか？」

「はい」

答はごく自然に出た。宝くじに当たった様なモノ——いや、それ以上だろう。得られるものはおそらく、万人が喉から手が出るほど欲しいモノに違いないのだ。何の努力もなしに得てしまうことに引っかけりを覚えるけれど。

「ですが、僕は力に溺れはしないでしょうか？」

引っかけりは、覚えた不安は、それ一つ。何の苦労もなく力を得たものが暴君に成り下がる光景などアニメや小説でうんざりするほど見てきた。自分も同じ道を歩まない保証はない。

「僕はそんなにできた人間ではありませんよ？」

「いえ、大丈夫です」

僕はこの時、女神の根拠がどこにあるのかわからなかった。数分後、与えられた力の説明を受け、力の選定理由を知るまでは——。

## 第一話「神との邂逅」 (後書き)

お待たせしました。

短いですが、第一話となります。

この僕が本作の主人公。

はたしてどうなりますことやら。

続きます。

## 第二話「干渉の始まり」

「うっ」

目の前に広がる光景は、地獄絵図というものに近かった。

「あああっ」

「畜生ッ……」

「痛い、痛い……母さ……」

うめき声、悲鳴、救いを求める声。折れた槍や剣が突き刺さる地面のあちこちに人や人だったものが転がり、死肉を食らうつもりなのだろう、カラスや猛禽類と思われる鳥が舞い降りてきている。

「これは……」

僕にとって初めて見る戦場。正直、勘弁して欲しかった。僕は、血とか内臓とかそう言う類のモノを見るのが大の苦手なのだ。学生時代、理科室のホルマリン漬けにされた標本が視界にはいるのが嫌で、棚の前では常に俯いていたぐらいに。

（だからって、もう逃げられないよな——）

僕は、女神の依頼を引き受け、異世界の地に立っているのだから。そもそも、瀕死の重傷を負った多数の人間をスルーできるほど度胸は据わっていない。薄情者ではない、としないのは、視覚的にダメな光景から逃げ出したい気持ちを僕が内包していたからだ。

（夢見が悪いってレベルじゃないもんな。と言うか、夢に見そう……）

もちろん、怪我した人を放っておけない気持ちもあった。それが霧散しそうなほどに目の前の光景がひどかっただけのこと。

「我に力授けし漆黒の人よ——」<sup>かみ</sup>

本来なら詠唱など必要としない。神々に授けられた力は、僕の想像を超えて強力なモノだった。

（この世界には、魔法が存在するが、人が扱うには必ず詠唱を必要とする、か）

まず、その法則を根本から無視して。

（人の手に負える魔法では、瀕死の者の傷は治せない……ね）

当然、魔法で行うことが可能な範囲も世界常識ひとのそれを遙かに凌駕していた。

「我が願いに代えて、傷つきし者らに慈悲を！」

「ひっ、なんだこりゃ……」

「うあっ、あああっ！」

言葉がが閻を喚び、地面からしみ出た閻は負傷者達を飲み込んで行く。当然、突如閻に飲み込まれゆく人々はパニックを起こし悲鳴を上げるが。

（治癒魔法なんだけどなあ）

そう、傷を癒す魔法なのだ。何だかおどろおどろしいのは暗黒魔法に属する為。所謂、暗黒神官とかRPGの敵役が使いそうな魔法を僕は行使した。

「わかりました、貴方に授ける一つめの力は、『閻』の力。閻を恐れる貴方なら、この力に溺れることはないでしょう」

と、女神が語り授けてくれた力だ。力の正式名称は『閻の神の寵愛』。閻の神の端末として、神の有する力を引き出せるというものらしいが、行使可能なレベルが、ラスボスクラス。やろうと思えば、大きな大陸一個を数千年間続く呪いをかけることさえ簡単らしい。

（反則だよなあ、いくら何でも）

もちろん、僕はそんなことをする気はさらさらない。この強力すぎる力を使えば、七日とかからず乱世を終わらせることができるだろうが、それでは意味がないのだ。

（強すぎる力は劇薬、効果はあるけれど副作用が大きすぎる）

大きな力でおさえつけたモノは、抑制が解かれたとたん、元に戻る。絶対的な力を持つ者が力で抑えつけても解決にはならない。だから、僕は力をセーブすることにした。

（人の生き死にかかっている時ぐらいは良いよね？）

死にかけている人を救う時は例外として。

「お、おい……」

「な、なんだ？ 傷が……」

ようやく魔法の効果に気がついたらしい負傷者達が、闇から解放されて騒ぎ始める。

（さて、それじゃ始めようかな……）

いきなりどこからか治癒魔法をかけられたのだ、元負傷者達には説明が必要だろう。

「おい、あそこに誰か居るぞ！」

「何だ、敵兵か？」

さすがにこちらにも気づいた兵士達が出始めている。

（それにしても、魔法のエフェクト拙いよなあ）

あれでは、『「神様に喚ばれて戦乱を収めに来た救世主<sup>ヒーロー</sup>」ですなんて言っても絶対信用されないだろう。だから、僕はこう名乗った――。

「我は『冥王』」

と。

「存命の者に用はない、故に戯れで傷を癒してやった」

不遜な物言いと、感情のこもらぬ冷たいまなざし。僕は精一杯、悪役ぶってみたのだ。まあ、暗黒魔法なんて使った時点で、この方向しか残ってないよなあとか自虐的に胸中で苦笑<sup>わら</sup>いながら。

## 第二話「干渉の始まり」(後書き)

はい、そういうわけで主人公が『冥王』だったのです。  
次回から『冥王』本格始動の予定です。

では、続きます。

### 第三話「冥王の策」

「立つがいい」

僕は見渡す限りあちこちに転がっていた兵の亡骸に命じる。

「うわっ」

「ひいい」

授けてくれた二つめの力は『死』の力。死者をアンデッド化することも可能で、やはりRPGの敵役である死霊術師がよく使うパターンの力だった。ますます悪役っぽいが必要な争いを事前に制止するにはちょうど良い。

「我が必要とするは、下僕になり得る骸のみ。せっかく拾った命を徒に戦で費やすならば、その骸は我が下僕として貰い受けよう」

傷が癒えたことで兵達が戦いを再開することを見越しての予防線。目の前の兵達が徴兵された民間人なのか軍人なのか素人の僕にはわからないが、前者であれば死ぬかも知れないところを助かったなら戦意より保身に気持ちは傾くはず、と僕は思ったのだ。

「っ、何をしている！ 敵は目の前にいるのだぞ、者ども戦え！」  
などと、叱咤する上官が将が負傷者に混じっていたとしても機先を制してしまえば、怖じ気心の方が先に立つだろう。

（頃合いや、よし。みんな、よろしく）

僕は不遜な態度をとったまま密かに合図を送って。

「冗談じゃねえ、俺は逃げるぜ」

「そうだ、死んでも名誉どころか動く死体になってこき使われるんだろ！ そんなのは、ごめんだぜ！」

上がった声は、骸の起きあがった光景に裏付けされた僕の言動を真に受けた兵達に広がり。

「逃げる」

「逃げるな、戦え」

「誰が戦うか」



「命あつての物種だろうが」

「うわああっ」

我に返った男の声が交戦を呼びかけるも、始まった兵達の潰走は止まらない。こけおどしに兵達に向けて死体を歩かせたのも効いているのだろう。

「くっ、くそ臆病者共めが……これでは、退くしかないではないか」  
忌々しげに吐き捨てた男は将なのだろう。まあ、それを狙ってやったのだ。

（みんなも、ご苦労様）

合図に答えて声を上げてくれた、本物の死霊達に労いの意味を込めたサインを送ると、僕は顔を歪ませ立ち去ろうとする将の男に皮肉を込めて声を投げた。

「骸の献上、感謝しよう」と。

（さて、これで生者は居なくなったかな）

僕が得た能力を最大限に活用するには、死体が必要となる。だが、ただ動く死体を作って道具のように扱うのは、気が咎めたのも事実で。

（いっそ全員生き返らせて協力して貰うのも手なんだけど、ホイホイ生き返れると命の価値が軽くなって戦争が頻発しかねないからなあ）

だから、不死者のほうが都合が良い。そんな目に遭うのはゴメンだと思ってくれた方が、戦いへの抑止力となるからだ。

「それで、思いついたのがその折衷案という訳じゃな？」

「そう言うことですよ、我が参謀殿」

僕はかけられた声に振り返ると、古びたローブを纏ったミイラに苦笑を返す。魔導死霊、リッチとも言ふ魔導師が生命を代価に膨大な魔力を得たアンデッドは、この世界ではおとぎ話にしか存在しないのだという。実際、リッチになることを目的に研究を積んだ魔導

師も多くいたのだが、成功には至らず。

「意識を残した上位不死者の大量生産か、むちゃくちゃじゃのう。ワシとて結局はお前さんに蘇らせてもらえなんたら死体のままだったと言うに」

僕が参謀殿と呼んだ元魔術師も、研究の完成を見ず命潰えた求道者の一人だった。

「まったく、お前さんに声をかけられた時は落ち込んだのじゃぞ？ 苦心の末自力でこの身体になり得たと思ったのに」

リッチになり得たのは、僕の力だったというわけだ。もつとも、僕にしても神々に授けられた力を除けばただの人間でしかない。

「参謀殿には多彩な魔法の才能と膨大な魔力があるじゃないですか。転移魔法なんて僕には使えませんし」

実際、この戦場を発見したのも参謀殿、転移魔法で連れてきてくれたのも参謀殿。まあ、今回の作戦発案は僕だけど、やったことの大半は授かった力によるものだった。

「そりゃ、お前さんとは年期も修練に費やした時間も比べものにならないから」

「では、始めますね」

とりあえず、参謀殿が 気をよくしたところで僕は本来の目的に取りかかることにする。

（まずは、身体たましいの持ち主を探し出して個々に交渉、協力してくれる人が多いと良いけど……）

得た力は目を閉じ念じるだけで周囲の魂の位置が淡い光になって浮かび上がる。参謀殿曰く、これもそこそのレベルの魔法であるらしいのだが、意識せずに行使できるのは、まさに神の恩寵ともいえるのかもしれない。

（さて、交渉するにしてもこんなうさんくさい容姿でついてきてくれる人がそんなにいるかなあ）

参謀殿の時は、願いを叶えたと言うこともあって交渉はスムーズに行ったが、人間なんと言っても第一印象が肝心だ。

「うーん」

思わず唸った僕は、考えた末に――。

### 第三話「冥王の策」(後書き)

間が空きましたね。

冥王の参謀役、ようやく登場です。

それはさておき、冥王は戦場にさまよう魂達をどう勧誘するのか。

続きます。

#### 第四話「戦乙女詐欺」

「本日はボクの為にご足労頂きまして——ああ、足を運んだのはボクの方か」

周囲に漂う魂へと語りかけるのは戦装束に身を纏った一人の少女だった。

「あー、それはいったいどういうつもりじゃな？」

リッチに声をかけられた人物の外見は。

「ボクは戦乙女、強き者の魂を新たな戦いの地に誘う女神……という設定なのだけど」

そう、何のことはない。魂に語りかける少女とは、少女の幻影を纏った僕自身だった。

「ほら、女の子の方が好印象何じゃないかなあって。こういう戦場に動員される兵や将は男性の比率が多いだろうから」

「むうう、だとしても神を名乗るにしては威厳とかそう言うものがない様に思えるがのう」

参謀役の指摘は尤もなのだが、僕の計画では魂とふれ合い死者と交渉する機会は十や二十ではきかない。

「もちろん生者と会う機会もあるだろうし、場合によっては『冥王』として会った人にこっちの姿で会うかも知れないでしょ？」

神々の授けてくれた三つ目の力は、全ての感覚を死者にすら誤認させてしまえるほどの凶悪な幻惑の力——だったからこそ、僕は幾つかの人物を演じることにしたのだ。活動しやすくする為に。

「中でもこの『戦乙女』は非のつけようのない正義の女神じゃないといけないんだよ」

当然、『冥王』と同一人物だなどという疑いを抱かせるわけにはいかない。

「人払いの為にとはいえ、『冥王』をちょっと厚顔不遜にしすぎちゃったかからね。ボクは逆に親しみやすいフレンドリーな感じで違

いを際だたせる作戦なのだ」

先ほどの失敗に懲りて魔法のエフェクトには神聖なイメージの幻影を纏わせてカモフラージュもしてある。若干やりすぎだとか、いい年したオッサンがこんなこととして痛いとか言うなかれ。そもそも、小説やゲーム、アニメなどに出てくるヒロインの台詞だって作者が男性でいい年なら、その作者の脳から出てきた言葉なのだ。

「どこに差異があるって言うんだ、と言うかそれがダメじゃオッサンは女の子を作品に登場させられないじゃないか」

いい年したオッサンしか出てこないファンタジー小説、掠られるヒロインも主人公も魔王も女神も全部オッサン。一部の特殊な層にしか受け入れられないんじゃないだろうか、そんなもの。

「そう言うわけで、ボクは戦乙女なんだ！ 誰がなんと言おうとも」

「ふむ、よくわからぬが大変なんじゃの」

そもそも、こう割り切り切りでもしないと演じてる僕のメンタルも耐たない。参謀ぼっかんしゃがかけてくれた言葉で胸の何処かが痛んだとしても、今の僕は戦乙女なのだ、自称がつくけど。

「あ、お待たせしちゃってゴメンね。ボクは戦乙女」

自己弁護と弁解に満ちた時間を待っていてくれた魂達に詫びると、自己紹介を経て僕は本題を持ちかける。

「キミ達を優れた戦士の魂と見込んで、一つ提案があるんだ。勿論、強制じゃないよ？ そして、無償のつもりもない」

僕には戦力が必要だった。神の力を使ってぱっと乱世を終わらせるわけではない以上、人々が己の力で平和を築きあげたと認識させる以上、超越者レベルに突出した戦士ではなく大勢の兵が必要だったのだ。

「ボクは強き戦士の力を必要としている。ともに、仲間としてボクと戦って欲しいんだ」

ある意味詭弁で欺瞞だった。ただの駒や労働力として使役するつもりなどないが、それこそアンデッドを量産して駒に使う悪役の死霊術師と結果的にはやることが変わらないかも知れないのだ。

（これは、地獄行きを宣告されても文句は言えないよなあ）

戦いで傷つき、死した者達をもう一度戦わせようと言うのだから。

「ありがとう」

交渉と説得の末、戦ってくれると約束してくれた死者は全体の三分の一ほど。戦乱の世を憂いていた者もいれば、僕の提示した報償が理由の者も居るが、約束してくれたからには、次は僕が彼らの答えに報いる番だった。

「最初にローウェ村、次がディーヤの村、その後更に北の村三つだったね？」

家族に会いたい、言葉を伝えたいという願いを僕は聞き届けた。

「転送魔法、お願いね。ボクはこの人達の仮の身体を構成するから」「うむ、任せておけ」

他の死者達に聞き取れない様にした声で参謀に指示を出した僕は、死者達の対面をかなえる為に死者の魂を具現化させ。

「最初の村の人はこれで全てだよね？」

転送魔法の負荷を考え、村一つ分の希望者だけにとどめた面々に確認をとる。

「うん、サーキスが居ないんじゃないか？」

「他にも何人か居ないんだが」

「えっ？ ……とりあえず、特徴を教えてください？」

想定外の返答に僕は一瞬面を喰らったが、思い至ったことがあった。問い返した。

「ああ、その人達なら怪我はしてたけど命は落とさなかったんだよ」

「ああ、それでか」

死者達から得た情報に符合する数人の男は『冥王』に追い散らされた兵の中に居た気がする。

「じゃあ、いいね？ 行くよ？」

僕が発した呼びかけは、実態を得たばかりの死者達に向けたもの

に見えて、参謀に向けたもの。

「っ」

まだ慣れない転移魔法の感覚から僅かに目をつぶった僕は、次の瞬間森の出口に居た。

「ああっ、帰ってきたんだなあ。俺達の村はこの先だ」

「良かった。ただ、出てくるのは少し待ってね？ 急に死人が帰ってきたじゃパニックになるかも知れないから」

微笑して死者達に声をかけた僕は、この後村がパニックになり少し凹むこととなる。勿論この時点ではそんなこと知りようはずもない。

「さあ、戦乙女詐欺の序章、第二幕のはじまりだ」

小声での呟きの通り、これはい道のりのはじまりに過ぎない。そう、僕は実感していた。



#### 第四話「戦乙女詐欺」(後書き)

と、まあそんな訳で。

実は同一人物だったのですよ。

まあ、二足のわらじってのは良くある展開ではありますが。

次回からは『冥王』の悪逆非道なふるまいと『戦乙女』の正義に基づく活動を書いて行けたらなあ、と思っております。

## 第五話「冥王様の宿探し」

「さて、我が居城とするに相応しき場所を探すでしょうか」

戦乙女として戦死者達を故郷の村々に送り届けた僕は、幻術を解いて冥王に戻っていた。全く持って一人二役は忙しい。勿論身から出た錆でもあるのだが、送り届けた人達へ明日の朝迎えに行くと言った以上、何処かへ一泊する必要があったのだ。

「ワシの住んでいた塔ではダメかの？ 補修すれば仕えると思うのじゃが」

「心遣いは嬉しいが、それは出来ぬ。元の主からお前が割り出されずには後々面倒なことになるかも知れぬ」

そもそもこの世界は乱世なのだ。戦の為に遺棄された城や砦、廃村など探せば今後の活動拠点になりそうな場所には事欠かないだろう。

「戦によって落城、多数の戦死者を出して遺棄され数年が経過した城か砦でもあれば申し分はない」

常人ならそんな不気味な場所には一泊するのもゴメンだろうが、僕にとっては戦力兼労働力と住居を同時に確保できると言う意味ではまさにうってつけだった。

「なるほどの、その冥王とやらの『いめーじ』を作るにもそう言った場所が良いわけじゃな？」

「落ちてすぐの城では奪還や補修して再利用しようとする者が居るかも知れぬ」

だからほどよく時間の経過した場所をリクエストに入れたわけだ。「なら、場所も辺境の方が良いじゃろうな」

「そうですね。参謀殿、拠点候補探しお願いします」

「それは構わぬが、冥王はもういいのかの？」

「今は二人だけですし、今日は色々キャラを作って疲れたんですよ」頭を下げた僕にきよとした顔で聞き返してくるリッチヘ苦笑

を返すと朝令暮改も甚だしいと思いつつも、僕は考え始めていた――戦乙女代行の選定を。色々やってみて予想以上に疲れたのだ、特に精神面で。そもそも、僕は武術の方がからっきしダメだった。小学生の頃、剣道を二ヶ月囓っていたがはつきり言って素人と変わらない。

（戦乙女って言えば、やっぱり先陣を切って敵に斬り込んで行くイメージだよなあ）

神々の力で身体能力は強化されているし、幻術と闇の神の加護を駆使すれば戦うことも出来はするだろうが、そもそも戦いにおける心構えの時点で蹴躓く。

（真剣持った相手と僕は向き合えるだろうか）

明らかに腰が引けてる戦乙女を想像して、僕は小さく嘆息する。

（けど、僕の力で乱世を収めないと拙いのにこれ以上人頼みにするのもなあ）

何だかずるいことをしている様で微妙に気が進まない。

「冥王殿、冥王殿……」

「えっ、あ、ああ……っうお！」

呼ぶ声に振り向いた僕が仰け反ってしまったのは、ぽっかりと空いた黒い眼窩が至近にあったからだ、これは当然我が参謀殿の目で。

「いかがされたかの？」

「いえ、考え事をしていたので驚いたんですよ」

嘘は言っていない、が至近距離にあったミイラ化した顔の方が主な原因だったなど言えなかった。この元魔術師にはさんざん世話になりっぱなしなのだ、そんな心ないことの言えるほど僕は恩知らずではなかったし。

「ご希望に添う物件が見つかりましたので」

そう、今から対面することになるはずのだ、おびただしい数の屍と。

「ありがとうございます。それじゃ、せいぜい邪悪な居城を構えられますか」

「じゃの。では、案内するでしょう」

次の瞬間、僕の周囲にあった景色が歪み。

「到着じゃ」

「うわぁ」

攻城兵器の跡なのか、あちこちのえぐれた城壁が僕達を出迎えてくれていた。

「して、力及ばず落城。城主たる汝はこの場で命を落としたか」

「ううっ、口惜しや……」

城壁に囲まれた城の最上階——ではなく、二階最奥の間で僕は先の城主と面談していた。先住者なのだ、蔑ろにするつもりは毛頭ない。化けて出られても怖……もとい面倒なので、心残りがあってこちらで何とか出来そうな者なら叶える腹づもりでもあった。

「願いの内、『家族と共に眠りたい』と言う望みは叶えよう。ただし、我が叶えるはそこまでだ」

敵討ちなど、死者の為に生者を殺すことなど出来る筈もない。

「汝の領民に夜盗まがいの真似を働く下種共は汝等からすれば捨て置けぬだろうが、我には何の関わりもない」

「では、その魔法は何じゃな？」

僕に参謀殿が茶々を入れたのは流石と言うべきか。突っぱねるようなことを言いつつも僕がアンデッド精製の魔法をかけた甲冑はむくりと起きあがり、兜の奥に禍々しい赤い光をともして歩き出す。

「戯れ、よ。汝が領民は汝らが守るが良い。我は何もせぬ」

「おおお……」

一人、また一人と起きあがり生前の様に主へ膝を折る人骨や甲冑に感極まった声を上げた城主の霊は僕に向けて頭を下げ。

「ただし、覚えておくことだ。汝らの行動に度が過ぎたところあれば、かりそめの命などたちどころに消え去るということな」

背を向けたまま僕は忠告する。略奪の阻止と敵兵の撃退で気が晴

れるならよし、敵領に進入して殺戮をするつもりであれば、それを許すつもりはない。

「ありがとうございます……」

「礼には及ばぬ、ただの戯れよ」

所謂ツンデレな反応を元城主に返しつつ、僕は歩き始める。

「汝が家臣数名と客室を一つ借り受ける。今宵の宿を探していたのでな」

とりあえず寝る場所を確保しなければいけない。

（あれで良かったのかな？）

数日後、この近辺では元城主達の活動によって二種類の噂が飛び交うことになるのだが、それを僕が知るのはまだ先のことで。

（あ、そっか。この肩書きと態度だと手伝うって言い出しにくいな）

実体化させた侍女の亡霊達が掃除を始め、客室を人が泊まれる状態まで急ピッチで整える様を無然とした表情で眺めつつ、僕は嘆息した。

## 第五話「冥王様の宿探し」(後書き)

『冥王』の悪逆非道なふるまい第一弾、亡霊騎士団誕生(＋α)。  
この悪逆非道なふるまいによって、かつての隣領兵による略奪に怯えていた領民達は当面の脅威から救われましたとさ、めでたしめでたし。

次は戦乙女側の行動を書いたら良いなあ。続きます。

## 第六話「戦乙女が目覚め（前編）」

「んッ……あれ？」

うめき声と共に目を開けた僕の瞳に飛び込んできた光景はぼやけつつもいつも見ていた天井とは別のものだった。

（ああ、そうか。昨日は参謀殿の見つけてくれたお城に泊まったんだっけ）

次第にはつきりしてくる視界に映ったのは、染みがある和風の天井ではなくベッドの天蓋。長年従事している人は偉大だと思う。ロボロだった客室は僕が眠りにつく頃には現役時代のクオリティを取り戻し、埃一つない立派な部屋に戻っていたのだから。

「これは、メイドさん達にお礼を言いたいところだけど……格好つかないよなあ」

「じゃろうな」

「っわあ！」

嘆息する僕にとって、起き開けに出現する魔導死霊は仰け反るに足る破壊力を持っていた。と言うか、朝っぱらからミイラ化した顔に出くわしたのだ。

「おっと、驚かせてしまったかの？」

「そりゃ、驚きますよ。僕、寝起きですよ？」

勿論寝起きに突然声をかけられた事なんて全体的な衝撃の二十％にも満たない。

「すまんの、この身体に睡眠は不要じゃからな。まして、お前さん以外の者は夜中も働き通しじゃったしの」

「ああそうか。騎士や兵は略奪者の撃退に出かけて……残った人達は城の手入れと墓地の用意だっけ？」

アンデッド作成魔法の大盤振る舞いを行った為に城は急ピッチで元の姿を取り戻しつつあり、同時進行で今生に未練のなくなった者達が眠る為の場所も整備されつつあったらしいのだ。らしい、とは

僕が眠っていて様子を確認していないからなのだが。

「じゃあ、出かける前に挨拶回りがてら城の様子も見てから行こうか」

勿論、『冥王』としては偉そうにふんぞり返りつつ城をぐるぐる回るだけだ。僕個人としては一人一人には無理でも会った不死者全員に挨拶をしておきたい所だが、それでは威厳が保てない。

「ならばワシは一足早く城主殿に挨拶がてら城を開けるむねを伝えておくとするかの」

「あ、よろしくお願いします」

参謀殿が連絡しておいてくれるなら、朝の散歩に時間をかけすぎて途中で立たなければなくなっても角は立たないだろう。

「さてと、どこから見て回ろう」

昨晚は殆どアンデッド作成魔法の行使で城を歩き回りはしたものの、途中から日が暮れ始め殆ど足下しか見られなかったのだ。準備段階で偶然通りがかった旅人にでも見られると拙いと明かりの使用を徹底的に避けたせいでもある。

「やっぱり、暗くなって見られなかった西――」

「はああつ、たあつ！」

「っ」

思案しつつ歩いていた僕は、呟きをかき消して城内に響き渡った声にすくみ上がり。

「な……」

思わず周囲を見回した。それが女性の声だったことに少し羞恥を覚えたが、不意を突かれたのだからそこは大目に見て欲しい。

（って、僕は誰に弁解してるんだろう……そんなことより、さっきのは）

「あっ」

声のした方を重点的に探せば、先方もこちらに気づいたのだろう。声を上げ、顔を赤らめた女性には見覚えがあった。

「も、申し訳ありません……驚かせてしまった様で」



縮こまりつつ頭を下げたのは、客室を整えてくれた侍女の一人。

何故か手には兵が訓練に使うものらしき木剣が握られているのだが。

「生前の習慣なんです」

問うまでもなく語り始めた話しによると、この女性は騎士に憧れつつも身分と性別から願ひ叶わず侍女として城勤めをしていたらしい。

「落城の折も剣を手に戦いましたが……」

（うん？）

このくんだりまで聞いた頃、僕の脳裏を過ぎったのは、昨晚の悩み。僕は、戦乙女を変わりに務めてくれる人物を求めているのではなかったか。

（よくよく考えたら一人でスカウトした戦死者達の指揮を執るのは無理があるよなあ）

人任せにするのは問題だとは思ったが、分隊長とか武将、指揮官クラスの人材が居なければ組織は立ちゆかないだろう。

（そもそも参謀殿と僕だけじゃ華がないし）

この時、僕の中で天秤は大きく傾き始めていた。この女性を側近に加えたいという方向に。

（けど、何て言おうかな……一応、この人は『冥王』としてしか認識してないんだよなあ）

「あの、冥王……様？」

僕が黙っているからだろう、目の前の侍女はおそろおそろ僕の顔を窺って。

（って、黙ったまま居たら不審に思われる……っていうか、もう訝しみ始めてるじゃないか。えーと、えーと）

「あの……」

僕は混乱していた。

「汝が……お前が、欲しい……」

何であんな言い方になったんだろう、と後悔したのは後のことで。僕の爆弾発言に女性は音でも立てるんじゃないかと思うほどの勢い

で凍り付いて。

（いや、確かに人材として欲しいし。美人だし、好みのタイプではあるんだけど……って、そうじゃなくて）

「はい……」

次に凍り付いたのは僕だった。頬を染め潤んだ目で、しかも上目遣い。確かに彼女からすれば僕は恩人にあたるかも知れないが冥王の方は最初に幻術を使う余裕がなかったこともあって外見は百分百自前なのだ。常識離れした魔法こそ使って見せたが、この時点でOKを貰える理由がわからない。

「ついてくるが良い。お前の主にも許可を貰わねばならん」

「は、はい」

こうなればもう自棄だった。何故目を輝かせて僕の後をついてくるのか、と言うか思いっきり誤解させちゃったんじゃないかなどと胸中で頭を抱えながらも僕は歩き出す。元城主と参謀殿が居るであろう謁見の間へ向かって。

## 第六話「戦乙女が目覚め（前編）」（後書き）

予告詐欺すみません。書いてる内に出発が長引いて『冥王』パートのままずるずると。

一応ヒロイン候補ゲット。

「騎士志望だった剣で戦えるメイドさん（幽霊）」です。

後編は彼女を戦乙女にする話になると思います。  
というか、今度こそ予告通りに進めたい。

## 第七話「戦乙女が目覚め（後編）」

僕はただ無言だった。間が持たない気もしたが、これ以上口を開くと墓穴を掘るだけだと思ったのだ。

（うーん、戦乙女に仕立てる方法かあ）

かわって考え始めたのが、誤解を招きかねない発言で望んでしまった後背の女性を戦乙女としての僕の側近に仕立てる方法なのだが。（まず、アンデッドベースで強化するか暗黒神聖魔法で蘇生させて生身の女性として戦乙女にするかだよな）

現時点で実体を持った亡霊の女性であることを考えると、難易度としては前者の方が低い。そもそも、神様も精霊も僕としては霊体っぽいイメージがあるので、一つの手ではあると思う。

（もつとも、浄化魔法で浄化されてしまう可能性があるって致命的な欠点があるんだよなあ。あと、アンデッド除けの結界や魔法が施されたところには入れないとか）

この世界で最高レベルのネクロマンサーである僕が全力をもって作成にあたればちよつとやそつとで浄化される様なことはないだろうが、アンデッドだとばれたら後々厄介なことになりかねない。

（となると、蘇生か転生がベストかあ。転生ならそれこそ特殊な力を付与することも難しくないだろうし、適当な他人の身体を乗っ取るってのは問題外だからなあ）

実を言うと「誤解させてしまったので、責任を取ることになるならやっぱり生身の方が」と考えたこともアンデッドという選択肢を選択肢から取り除こうとしている理由の一つではあった。

（下心なんかじゃないと思いたい……けど）

どう考えても下心だろう。そもそも、こんな展開になった理由の何割かは、件のメイドさんが僕の好みのタイプだったこともあるのだ。公私混同など褒められたものでないし、まだ活動を始めていない内から女性にうつつを抜かす様になっては困る。

（自分を信用できない様であれだけ、使命が使命だけに自分に厳しく行かないといけないよな）

などとまとめて胸中の葛藤を収めようとした時だった――僕の耳が女性の声を知覚したのは。

「王様に見初められて……おとぎ話だけの話だとばかり思ってたけど、あるんですね……」

（しまった、そこかああああっ！）

可能なら絶叫したい。絶叫したかった。確かに、言われてみれば王様とか王子様に見初められて妻に言うストーリーはうら若き乙女が抱くサクセスストーリーとしては鉄板だ。騎士志望とは言っていたが、彼女にとっての僕は白馬の王子様だったのだろう。

（『冥王』って肩書きからすると白馬というか骨の馬……いや、ア宁德ッドの担ぐ骨製の輿にでもものってそうないメージだけど）

などと、よけいなことを考えている場合ではない。何とかして誤解を解き、本当は世界救済事業の片腕になって欲しいんだと話を持って行かなければならないのだ。

「汝……名は？」

とりあえず、名前を聞こう。

（よし、僕は冷静だ）

いつまでもメイドだとかこの女性だとかではこの人にも悪い。説得するにしても名前で呼んだ方が効果的だろう。

「フィーナと申します」

ここまでは成功だった、だが。

「ですが、良いのですか……こんな私で？」

生身でなく歪められた魂だけの存在であることを指しているのだろうが、その目が駄目だった。

「案ずるな、我に任せよ」

声は自然に口をついて出ていた。そう言えば、昔からすがられると駄目だった気がする。お節介焼きでもあった。だからこそ、元城主の頼みを結果的に聞いたことになって騎士や兵士達をア宁德ッド

化という形ではあるが蘇らせたのだろう。

「汝が願い、叶えた代償だが――」

城主の霊と参謀殿の会話に割り込んだ形となった僕は、半身ずれる様に移動して後ろに連れたメイドの亡霊を見せるとそのまま言葉を続けた。

「あれを貰い受ける」

本来ならここでこの城を譲り受けるという話になっていたのだが、元城主はともかく参謀殿は驚くかと思ったのだが表情には何も出さず。

「冥王様がそう仰せならば」

と自然にこちらへ合わせてくる。結果だけみれば一晩の苦勞で手に入れるはずだった居城をうっちゃって一人の女性を手に入れたわけだが、我ながら馬鹿だと思う。

（さあ、ここからが本番だぞ）

しかもこの後、どう考えても勘違いを加速させて居るであろうフイーナに本当のことを話して協力を取り付けなければいけないのだ。（逃げるな僕、逃げるな……）

目には見えざる絶壁のイメージが似合いそうな難関を前に僕の手の中は嫌な汗で濡れていた。

「んッ……私」

朽ちて屋根が半分落ちた馬小屋の中、ゆっくりと目を開けたのは一人の少女だった。緑がかった長すぎる髪は急速に成長させた為。

「目覚めたか」

ぼんやりと天井を見上げる少女に僕が声をかければ。

「冥王様ッ！」

「んぷッ」

大きなタライから手足を飛び出させる形で産湯浸かっていた少女

は一糸纏わぬ姿のまま、僕を抱きしめた。

「私、本当に生き返って……」

感無量の所申し訳ないのだが、出来れば放して欲しかった。

「フィーナ殿、フィーナ殿……」

「へ？」

「冥王様を殺す気かの？」

そう、一応生身の僕は少女の胸で窒息しかけていたのだから。

「……あ、え、……ご、ごめんなさい」

謝るのはいいのだが、それともう一つ。

「ふ……服を」

「服？ ……っきゃああああ？！」

「ぐっ」

ようやく気がついたらしいが、何とか僕の方も限界だった。

窒息しかけた直後に放り出されて頭を強打したのだ。

「冥王殿！」

参謀殿の僕を呼ぶ声が微かに耳に聞こえたのは、意識は闇に溶けて——これが、僕の率いる戦乙女が筆頭、フィーナの誕生だった。

闇の神に仕える神獣を親とし、転生前の記憶をそのままに肉体だけを戦うに充分な年齢まで成長させたのだが、これで良かったのかどうかは、正直僕にもわからない。生憎直接未来を見るという力は授かっていなかったし、この時僕は気絶したままだったのだから。

## 第七話「戦乙女が目覚め（後編）」（後書き）

ようやく名前も付きまして、主人公を除けば初めての戦乙女、フィーナの誕生です。

元騎士志望だけあって剣の腕は確か（だと思う）のでようやく殺陣的なものも可能になりました。

次回はフィーナと村で過ごしていた戦死者の皆さんとの初顔合わせの予定。

もちろん続きます。



## 第八話「初顔合わせ」

「それじゃ……行くよフィーナちゃん」

頭の痛い時間再び——戦装束を身に纏った少女の幻影を投射しながら、僕はフィーナに呼びかけた。

「は、はい。冥……戦乙女様」

応じるフィーナも戦装束に身を包み、どこから見ても戦乙女だった。スカートからちろりと漆黒の尾見えていることと、髪の中から犬系の獣を思わせる耳が覗いていることは大目に見て欲しい。フィーナの転生先に全く当てのなかった僕としては、他に選択肢もなかったのだ。

「いつてらっしゃい、我が娘。気をつけて行くですよ」

闇が狼の形を成したかのような闇の神の使いは僕のとんでもないお願いを快く引き受けてくれて、今は実の娘でもあるフィーナに愛情の籠もったまなざしを向けつつ人語で語りかけている。

そもそもこの神獣、さまよい形すら保てなくなった魂を分解し、虚無へと還したり精霊など別の霊的存在に生まれ変わらせることを役目としているそうで、『地獄の番犬』といういかにも恐ろしげな異名を持つ。異名を聞いた時、複数首のある本性があるのではなどと思ったのだがそういう事はないらしく、娘であるフィーナはこの母から犬耳と犬尻尾を受け継ぎ誕生したという訳だ。亡霊というか人間だった頃と比べて髪の色が暗くなったのも親から引き継いだもののなのだろう。

（いずれ自身の力で制御して出し入れ可能になるってことだし、深く考えるのは止めよう）

そもそも、フィーナに真実を打ち明け、納得して貰うまでにそうとうの気力と時間を費やしたのだ。戦乙女として戦死者を送り届けた村々までは参謀殿の転送魔法があれば移動に時間など殆どかからないにしても、フィーナが尻尾と耳を隠せる様になるまで待ってい

たら間違いなく遅刻する。

（あの人達の協力は必要だし、信用を落とす様なことはできないよなあ）

そう言う意味でも遅刻は拙い。

「参謀さん、よろしく」

「承知した。まずはローウェ村じゃの」

ちなみに、参謀殿を人前に出す時は僕が生前の姿を少しアレンジした幻影を纏わせている。設定は隠居して穏やかな老後を送るところだった大魔術師。

「そうなるね。一応今回スカウトした人達は、戦場ではボクじゃなくフィーナちゃんに指揮して貰うことになると思うから」

まだ確定はしてないが、戦う相手は山賊や盗賊、怪物や邪教の徒など平和に暮らしている人々の脅威となる者となる予定だ。いきなり現れて『人々を救う女神です』などと言ったところで耳を傾けてくれる者などどれほど居ることか。

（まずは、名声と実績を得て人々に認知されないとどうしようもないからなあ）

広報に神から授けられた力を直接使うのは避けたい、それではカルト教団もどきの誕生が関の山だ。ゆくゆくは僕の手が離れても活動できる様な、人の為になる集団を世界に残したい。

（だからこそ、人間にも出来る普通の戦いで名をあげる）

その為にも将に従う戦力が必要だった。

「着きましたぞ」

「うん」

参謀殿の声に、目を開ければ飛び込んできたのは昨日見た村の入り口。

「あら、おはようござい……」

「おはよう。……ちよつと心苦しいけれど、迎えに来たよ」

人の姿を見て反射的に挨拶しようとしたのであろう女性にばつの悪そうな顔で僕は挨拶を返すと、言葉が続けた。

「迎えに来たよって、伝えて貰えるかな？　ご主人と、昨日僕が連れてきた人達に――」

「っ、連れて……行くんですね？」

息を呑んだ女性の問いかけに対して、ここで首を横に振るわけにはいかなかった。

「そう、だから最初に言ったんだよ。お礼なんて言わない方が良いと思うよ、ってね」

結局の所、この女性から僕は夫を奪って行くのだ。戦乱を終わらせ、世界を平和にすると言う大義名分があったとしても。

（はつきり言って、貰った力ではぱーっとやってしまえば……）

ハッピーエンドを捏造することは容易い。幻術で戦闘自体をなかったことにして死者を全員蘇生させ、幻術の大盤振る舞いで夢オチにでもすれば送り届けた人々は平和に過ごせるのだ。

（もちろん、この村の人達が兵役にかり出され戦った理由がなくなることも条件の一つだけど）

全てをひっくり返して何とかする力が僕にはあった、ただし、力を使用するつもりはさらさらなかった。強力すぎる力は劇薬。僕の手だけで作られた平和は僕の助力なしには維持できないものなのだ、それでは意味がない。

（結局の所、道は二つしかないようなものか）

無駄に人が傷つくかも知れず無駄に死ぬかも知れないがより長く確かな平和が望める道、僕が選び取ったのは険しい方の道だった。

「心の準備は出来てる？　これからキミ達にはボクとともに戦って欲しい……というのはもう話しているよね？」

昇天する選択肢を選んだ死者達を浄化の魔法で昇天させ、残った戦死者達の前で僕は確認を取る。こういう時、『やっぱりやめた』と心変わりする者が居てもおかしくはなかったし、フィーナを紹介

するにしてもワンクッション置きたかったのだ。

「大丈夫だ。この皆で相談もしたが、異議のある者は居なかった」

「そう。まずはお礼を言わせて貰うね、ありがとう」

予想に反して腹が据わっていたのは一度死を経験したからなのかそれとも別の理由なのか、僕にはわからなかったが、力強い答は本当にありがたかった。

「これからよろしくお願いします、と続けたい所なんだけど……キミ達に紹介したい娘がいるんだ」

これならフィーナの紹介もスムーズに行くだろう。

「フィー……」

そう思いつつフィーナを呼ぼうと振り返れば視線の先には誰も居らず、僕は固まって。

「あの……はじめ、まし……て」

木の陰から犬耳の生えた顔半分をぴよこんと覗かせつつおどおど挨拶するフィーナへ気づくのが僅かに遅れる。

「あ、あー……彼女がキミ達の指揮を執るフィーナ」

これから先仲間が増えるであろう事を考えれば、指揮官の存在は理解して貰えるだろう——などと思っていた僕の確信がほんの僅かではあるが、ぐらついた初顔合わせ。後で聞いたところ、あの犬耳が微妙に恥ずかしかったらしい。

（大丈夫、だよね……）

想定外の展開に一抹の不安を覚えつつ、僕はぎこちない動きで首を死者達の方へ向けた。

## 第八話「初顔合わせ」(後書き)

乙女心は複雑です。

そんな訳で顔合わせも無事終了？

ちなみにフィーナさんの説得は余力があれば外伝か何かでやれたらいいなあ、とか思っています。

もちろん続きます。

## 第九話「戦乙女の出撃」

「えーと、キミ達のことを今後ボクは勇者と呼ぶよ」

これから共に戦ってくれる人を相手にいつまでも死者は拙いというのもあるが、彼らと僕がこれからスカウトするであろう人達を区別しておく為の呼び名が欲しいと思ったのも事実。『勇者』という名称に決めたのは、もちろん僕が戦乙女を名乗った事に起因する――それを、何故このタイミングで口にしたかと言えば、フィーナが心の平静を取り戻せるまでの時間稼ぎというわけだ。

（僕のせいと言えば僕のせいだからなあ）

まあ、転生してから一日も経っていないというのに、人前に出したのは僕の失敗かも知れない。いくら生前と亡霊時の記憶や経験が残っているとはいえ、心の準備とか色々あるだろう。約束の時間間に合わないとか、フィーナへの説得と説明で僕が精神的に消耗していて余裕がなかったなどフィーナには関係ない僕の都合だ。

（こう、考えなしに行動してたことが後から後から実感できて凹む）  
などと愚痴る資格など今の僕にはないだろう。この時間稼ぎだつて罪滅ぼしだなどと言ったら噴飯ものだ。

（うん、フィーナには後で謝っておこう）

僕は心に決めて勇者達へ説明を続ける。

「それで……キミ達にもフィーナにも初仕事、というか初陣になるんだけど」

「邪教集団？」

「うん、そう。貧困と戦乱にあえいだ民が宗教に――ありがたい教えにすがる、ってところまでは問題ないと思うんだけどね」

教えの名の下にその集団が行ったのは、夜盗まがいの略奪や殺戮だったりするわけだ。

「襲われるのはたいてい自警団とかそう言った防備を持たない小さな村とか戦に男手を奪われて戦える者の居ない村とかだけだね」

この場にいる勇者達も元は村人だ、言わんとするところは伝わるだろう。

「そ、それでその邪教集団ってのは」

「ああ、聞いたことはないが俺達の村は大丈夫なのか？」

返ってきた反応も想定通り、ご近所にそんな危険な輩が迫っていれば、明日は我が身かもしれないのだから。

「大丈夫、一応これは隣国の隣国、しかもその北東部のお話だから。とは言っても、ボクの立場上放っては置けないわけで」

「なるほどな、あんたの言う新たな戦いの場ってのがそれか」

「まあ、夢物語と言われるかも知れないけどね。ボクの目的は戦乱を終わらせて人々が平和に暮らせる世界を築くことなんだ」

勇者の一人が発した声に頷き、僕は神々から頼まれた本来の使命を勇者達に明かす。流石に僕の正体までは明かせないが、一緒に戦ってくれる相手である以上、仁義というか礼儀は守っておきたい。

（邪教がらみの賊軍討伐から名を挙げてゆくゆくは大きな勢力に：民を連れて逃げまどったり義兄弟を殺されて逆上のあまり敵の火計にかかって大敗北とかなないと良いけれど）

元居た世界、何処かの国の古い英雄の生涯を何となく思い出しつつ僕は横目でフィーナを見た。

「それじゃ、行くよ」

もう大丈夫、ということだろう。こくりと頷いたのを見てさっと片手を挙げるが、これは参謀殿への転移の合図。

「うわあああ」

「誰か助け」

転移魔法によって周囲の景色が一変し、最初に飛び込んできたのは悲鳴と救いを求める声だった。

（少し遅かったか……ん？）

目の前の惨状に僕はほぞを噛むが、視界に映った参謀殿は小さく

首を振って杖で遠方を指し示す。

（あれは）

杖の先にあったのは、小さな村。僕にしか見えない様幻術で覆った参謀殿のジェスチャーを僕が正しく理解できたのなら。

（そうか、救う予定だったのはこの村じゃなかったのか）

転移途中に一つ手前の村が襲われている様を察知し、転移先を強引に変更したらしい。

（ま、どっちにしても見過ごせないよなあ）

救える命が一つでも増えるなら、ここは躊躇っている場合ではない。

「フィーナ、みんなの指揮をお願い。それと、基本的にキミ達は生前より丈夫で強くなってるから遅れはとらないと思うけど、気を付けて」

前半はフィーナへ、後半は勇者達に告げると、僕も幻影の剣を抜いて地を蹴った。

「参謀殿、僕をあの村の手前に」

だが、僕がしたのは村人を助けることでも邪教の徒を斬りつけることでもなく、参謀殿に駆け寄って短距離の転移を頼むことだった。

「何故じゃ……むっ」

参謀殿も気づいたのだろう、僕が気づいた邪教徒の別働隊に。

「僅かなタイムラグはあったけど予定通りだったみたいだよ」

「じゃが、『勇者達』もフィーナ殿もこの村で手一杯じゃろう？」

そう、いくら強さの底上げをしていると言っても勧誘できた勇者達では二つの村を守りきるのは難しい。僕のキャパシティでは説得と説明が間に合わないこともあり、最初に勧誘できた勇者達は大きな戦場の一端に過ぎなかったのだ。後に聞いた話では『冥王』の介入を他国の干渉と誤解した両陣営は一時的に停戦し、もはや居もしない『冥王』を探しながらの膠着状態が続いているらしいが、今はどうでも良い。

「大丈夫、ちょっと力を使っちゃうけど足止めぐらいならボク一人



だけで充分だよ？」

実は僕には勝算がある、人には見せられない様な汚い作戦ではあるのだが。

「本当かのう、何ならワシもついて行くが」

僕の目と声に自信を感じ取ったのだろう、最初はそんなことも言っていた参謀殿だったが僕が制し。

「みんなをよろしくねっ」

ビツと指を立ててお願いすると、微妙な表情を浮かべつつも頷いた。一応、これも役作りなのでそんな反応はしないで欲しいなあ、とか思っただけで僕も口には出さない。

「さあ、今日の『一人でできる邪教集団撃退法』は戦乙女の極悪非道なゲリラ戦」

冗談めかしたことを口にしつつ、僕が自分に施したのは肉体の透明化及び気配と音の完全消去。透明人間状態になって誰にも気づかれなくなる、という幻影を纏ったわけだ。

（これ、本当に反則だよなあ。他に使える人間居ないと良いけど）

つい最近遊んだゲームにこれと似た状態になるアイテムがあった。効果は絶大、チートというか完全にゲームバランスを崩壊させる。敵がこちらを認識しなくなる為一方的に攻撃して相手を倒せるのだ。しかも、町中で盗みをしようが人を殺そうが認識されない為に捕まらない。

「さて、この状態でボクが敵に襲いかかったらどうなるでしょう？」

いくら素人とはいえ刃物は持っている。昨晚泊まった城で城主の亡霊から餞別に貰ったのだ。

「クスクスクス……あーそぼ？」

「あ？」

息を殺し村に迫ろうとしていた邪教の徒達は大混乱に陥った。最初にわざと声だけ聞かせて、適当に剣で突きを繰り返す。犠牲者も

ゲームでは立ったまま悲鳴を上げて傷ついて行くだけだったが、血の通った人間ではそうもいかない。

「ぎゃああっ！」

「悪魔だ、悪魔が出たああっ！」

少女の声が聞こえたかと思った直後、仲間が何かに刺されて傷つき、あるいは倒れて行く。こんな光景にさらされたら僕だってパニックに陥るだろう。僕はタチの悪い怪談を現実のものにしながら、一応殺しはしない様に急所を避けつつ突きを繰り出した。目的は相手を殺すことではなく、撃退することなのだから。

（やっぱり剣の扱いって難しいなあ）

と、のんびり胸中で呟いてみるが、これは現実逃避。僕は血や内臓とかを見るのが苦手な人間としてはこうでもしないと追い散らす前にこっちが逃げ出してしまいかねない。

「ねえ、もっと遊ぼうよー？ うふふふふ……」

などと一見ノリノリでやっている様に見えて、心の中ではさっさと逃げ帰れと辟易しているわけだ。ただの幻影だけで追い返すことも出来るのだが、相手は人を殺傷して者を奪おうなどという輩、些少は痛い目を見なければまたやってくる可能性がある。

「うぎゃあぁ、殺されるー」

「退却、退却だー」

（ふう、ようやく終わった）

ようやく襲撃部隊を退却に追い込んだ時、僕の着衣は赤黒い斑だらけでとてもではないが幻影を解除できない有様になっていた。

「血の染みって落ちにくいんだよなあ」

などと顔をしかめる余裕などなく、よたよたとした足取りで時々ふらつきながらフィーナ達が戦って居るであろう村へと向かう。

「おっと」

この時の僕はまだ知るよしもない、この森が呪われた森と呼ばれる様になった由来を。よろけて僕のつけた血の手形が怪談を裏付ける証拠になったなどと言うことも。

## 第九話「戦乙女の出撃」 (後書き)

やはりチートな能力ですね。

そんな訳で今回は『戦乙女』活動の第一回となります。

次回は第一回活動の後始末編の予定。

もちろん続きます。

## 第十話「後悔と奇跡」

「戻ってくるんじゃないかった」

などと僕が小声で口にしたのは仕方のないことだと思う。村のあちこちに横たわる死体と血まみれのフィーナ達や村人を見て、顔を背けたくなる気持ちと抗いながら――僕は作り笑顔に微笑の幻影を重ね、村の中央へと向かい歩き出す。

「よかった、キミ達は無事だったみたいだね」

「えっ、あ……め、め……戦乙女様っ」

僕は何というか今にも吐きそうなんだけど、などとは口に出さず抱きついてきたフィーナの言葉の先を察して頷きを返す。一瞬、冥王と呼びそうになったのはまだ慣れてないからなのか、姿の見えなかった僕を心配していたからなのか。

（参謀殿は僕が戦線を離れた理由は言っていないと思うけど、心配させちゃったよなあ）

少し悪いことをしたと思いつつ、抱きついてきたフィーナの髪を撫でる僕だが。

（何というか、これ端から見るとどう見ても不自然……）

男女での抱擁ならわかる、事実僕とフィーナは男と女。素の姿なら良いのだろうけど、あいにく今の僕は少女の幻影を纏っているのだ。この世界で同性同士の恋愛がどれだけ認知され、どういう目で見られているかは知らないものの、上官の無事を喜ぶ部下のアクションで誤魔化すにはオーバーすぎる。

「えーと、フィーナ？」

頬を染めるな、幸せそうな顔をするな、とツツコむ訳にもいかず、僕はやんわりと声をかけると出来るだけ優しくフィーナの身体を引きはがそうと試みる。

（いけないいけない、早く怪我人の手当をしないと）

村人の平穏な暮らしを奪おうとして、実際奪ってきたであろう邪

教の徒はどうでも良いが、犠牲者である村人達は出来うる限り救いたい。もちろん、死者蘇生は使えないけれど。

「フィーナ、怪我人の治療をするから。勇者のみんなは少し向こうに下がってて」

「あつ、も……申し訳ありません」

「わ、わかったぜ」

直接言っようやく僕の意図がのみこめたらしいフィーナが我に返るなり恐縮しつつ距離を取ったのと勇者達が下がったのを確認して僕は幻影に翼のエフェクトを追加しつつ、傷を癒す力をもつ魔力の奔流にも神々しいイメージで装飾を行った。ここで素の暗黒神聖魔法を疲労すれば、最初の失敗の繰り返しなのだ。

（よし、これなら不気味には見えない）

フィーナはともかく、ネクロマンサーの力で存在する勇者達は回復魔法で逆に即死する可能性がある。彼らを効果範囲に入れない様に細心の注意を払いつつ、僕は小声で詠唱を始めた。

「我に力授けし漆黒の人よ――」

はつきり言って、今の僕は自称下級神なので詠唱で誤魔化す必要など無いのだが、無詠唱が癖になってしまうと冥王の時に『つつかり』で無詠唱の魔法行使をしかねない。転ばぬ先の杖という事にして貰えるといいな、何て心の中に誰に向けてかわからない弁解をしながら、僕は癒しの力を解き放った。

「我が願いに代えて、傷つきし者らに慈悲を！」

「おおっ」

「光が、光が……」

まばゆい光の輝きが照らされた怪我人の傷を癒して行く。こういう時、ゲームをやっていて良かったなと切に思う。コントローラーを握りしめ、テレビ画面で見た回復魔法のエフェクトを参考にしたせいか、癒<sup>ごまかしのみため</sup>しの光は出来が良い。

「奇跡だ、神の奇跡だ！」

「ありがたや、ありがたや……」

——重傷ですら一瞬で完治するこの世界では考えられないレベルの回復魔法は村人達には神の奇跡と映ったらしい。魔法の認知度が低いのか回復魔法のレベルが高すぎて魔法と知覚されなかったのかは不明だけれど。

（何にしても、これで村人の方は良いかな？ あとは亡くなった人の中に勇者になってくれそうな人がいるかだけど、こっちは難しいよなあ）

邪教徒が狙った時点でこの村には戦える人間が、殆ど居ないはずなのだから。

（ま、一応勧誘はするけどね）

襲撃の犠牲者とその家族を対面させる——現勇者達にも行った家族との面会だけでも僕はさせてあげたいと思ったのだ。おそらく戦力増強は見込めないと、慈善事業になることを覚悟の上で。

「戦乙女様、どうか僕を仲間に」

「わしもお連れ下され、この恩に報いぬ事には——」

どうしてこうなった、と僕が頭を抱えるハメになったのは一時間ほどの後のこと。意外なことにスカウトに応じる死者はかなりの数に上ったのだ、問題は大半が子供や老人という非戦闘要員であったことと。

「じいさまが行くなら、わしも連れて行ってはくれんかのう？」

「どうか私もお連れ下さい、あの子が行くなら——」

生者まで同行を希望してきたこと。いくら何でも早すぎるだろうと全力でツツコミいれたくなるような『民を連れて逃避行フラグ』回収時期の到来。そもそも僕がフィーナを除いてアンデッドしか連れているのには、ネクロマンサーとしての力を最大限に活用するというもの以外の大きな理由が一つ存在する。死者は飯を食わないのだ。

（生きてる人間連れて行くにしても一体どこに連れて行けと？）

生者を側に置くなら衣食住の全てを確保する必要がある。

「あの、戦乙女様……城主様の」

「うーん、それもちよつとなあ。フィーナは返したくないし」

「戦乙女様……」

フィーナの元奉公先だった城のような本拠点を構えていれば話は別だったのだが、奉公先の元城主には城ではなくフィーナを貰うと話をつけて出てきてしまっている。

（出戻り、とかないよなあ）

今更あの城の厄介になるのはいろんな意味で恥ずかしいし、約束を違えることになる。

（お金に拠点に食料含む物資……必要なものだらけだ）

感極まったフィーナに抱きつかれて、不自然な光景を村人や勇者達に見せつけながら、僕は遠い目をする。明らかに、前途多難だった。

## 第十話「後悔と奇跡」(後書き)

予想外の展開で途方に暮れる戦乙女。

問題は山積みだが無事解決できるのか？

といいつつも次回は『冥王』側メインの予定。

果たして問題の解決法とは？

続きます



## 第十一話「復讐者といっしょ」

（さてと、どうしたものかなあ）

結局の所、拠点の無かった戦乙女の僕に出来たのは、近隣の領主に一時的な保護を頼むことだった。評判の良い領主を選んだことと僕達が実際に邪教集団を撃退していたこともあって、僕は客将扱い勇者や村人達は私兵という待遇で一時的なものとはいえ身の置き場を確保することができ――。

（何処かに売り込むにしてももうちょっと色々活躍して名声を得てからのつもりだったんだけどなあ）

人生はままならない、と嘆きつつ僕は幻影を解いて参謀殿と共に半壊の城塞を眺めていた。

「ここがこの辺を荒らし回っている残虐非道な山賊の巢窟だっけ？」

「らしいの。で、お前さんはここをどうするつもりかの？」

「うーん、手加減しなくて良い相手だからなあ。単に労働力としてのアンデッドを作るならこういう輩の死体を使うのが良心はあまり咎めなそうだけど」

かなり物騒なことを口にしながら同時に考えるのは、この城塞の攻略法。今の僕が『冥王』である以上勇者達の力は頼れず、参謀殿の攻撃魔法では。

（掠われて囚われている人が居るかも知れないし、派手に壊すと拠点に使えなくなるからなあ）

となると、邪教集団を倒した時と同じ手で単身突入し、一人一人倒して行くか。

（いや、山賊の拠点なら罠を設置してる可能性もあるし。どうし…ん？）

ああでもない、こうでもないと考えていた僕の視界にちらりと白いものが見えて。

「これは、骨？」

動物のものか人のものかも知らないいくつもの骨が散らばる一角はゴミ捨て場代わりなのだろうか。

(うわっ)

近寄ってみればすえた臭いがし、正直目に向けたことを後悔する様な光景が広がっていた。僕から見ればゴミと腐りつつある何かの死体などが主な構成物なのだが、こういったものを自然に還す生き物達にはご馳走なのだろう。

「まあ、こういう場所まで几帳面に片づけてる山賊が居たら逆に怖いけど」

虫がうじゃうじゃ湧いてるのはいただけない。勇者達の面倒を見ていて貰うという名目でフィーナを連れてこなくて良かったと思う。

「城塞攻略……一応、だいたいの見通しはついたかな」

始めに僕が使ったのは、ネクロマンサーとしての力。

「命なくして久しき者共よ、我が問いに答えよ」

おそらく散らばる骨には人骨も混じっているだろうと判断して骸が主の魂を呼び起こす。参謀殿の集めてくれた情報もあるのだけけど、情報は多いに越したことはないだろう。

(必要なことだけ聞き出せば、情報が多すぎて混乱してしまうなんて事もないよな)

もっとも白骨化するほど時間の経った死者からの情報だ、新鮮さには欠けるかも知れないけれど、欲しい情報の一つでも知ってれば儲けもの。

「ちくしょう、イカサマなんてしちゃいねえのに」

(……なるほどね)

しょっちゅう未練やら自分を殺した相手への恨み言を言う情報源の魂は、仲間内の賭け事でもめ私刑に欠けられて殺された山賊のものだったらしい。

(つーか、精神的に疲れるわ)

なんと言えぱいいのだろう。情報を得たのは嬉しいのだが、価値観や倫理観が全然違う相手との会話は疲れる。村を襲って何の罪も

ない人々の生活を奪う様を自慢話として語られた時は、浄化魔法をぶつけて消し飛ばしてやろうかと思っただし、そのほかにも数個、聞くに堪えない話を聞かされるハメに陥ったのだ。

（流石にこれは成仏させなくて良いよね？　むしろ魂粉碎して魔力に還元するとか）

とりあえず、一片の慈悲もかけずに殲滅して良さそうだとわかったことも収穫と言えば収穫なのだろうか。

「立つがいい」

僕はとりあえず、周囲の死体や骨を使って作れる限りのアンデッドを作成し命じた。

「汝等が命を奪いし者を絶やせ」

ただし、動物のものらしい死骸や骨から作ったアンデッドにはこの命を与えない。囚われて料理人として働かされていた捕虜が絞めた鳥とか豚が原材料だった場合、被害は罪もない捕虜にまで及びかねないからだ。

「と、言うわけで……アンデッドを陽動兼罨除けに使ってとりあえず城塞内に忍び込んでみます」

「なるほどの。それでお前さんとこの死者達は良いとして、ワシは」「参謀殿には逃げ出した山賊の殲滅と、逃げ出せた捕虜が居た場合、そちらの保護もお願いしますよ」

頷きが続いて問いかけてきた魔導死霊リッチの参謀殿に要請を出しながら僕は幻影の力で気配消しを兼ねた透明化を自分に施し、攻撃命令を出さなかった元動物のアンデッドを罨除けに先行させながら歩き出す。

「うぎゃああ！」

「骨が、骨がああっ！」

近寄ってくる白骨の姿を見て絶叫した見張りらしい山賊が悲鳴を上げながら逃げ出す姿を視界に収め。

「がっ」

「うがっ」

「へ？」

城塞の入り口を入れてすぐのところから上がった悲鳴を聞いて僕は思わず声をもらした。動く白骨達はまだ城塞に入っていない、剣の代わりに錆びたナイフや折れた椅子の足などを間に合わせの武器として持たせてはいるが、攻撃した様子もなかった。

（一体どうし……あー）

透明化の効果もあって身を隠す必要もなく入り口に辿り着いた僕が見たのは、血まみれで天井からぶら下がった鎖付き鉄球と顔面や胸部に致命傷を受けて倒れた山賊の骸。見張り達が動転するあまり城塞内の罠に自分で引っかかった、と言うことらしい。

「流石にこれは同情してやるべき何だろうか？」

何て事を考えつつも僕は死んだばかりの山賊達を復讐者達の戦列に加える。敵の死者が純粹にこちらの戦力になるというのはある意味チートなのかも知れない。しかも、なまじ味方の姿をした敵になる為、山賊達からすればきわめてタチの悪い相手となることだろう。（顔が損傷した方は無理だけど、胸の方なら誤魔化せば生きてる様に見えるかな？）

上手く誤魔化せれば潜入が少し楽になるかも知れないと考えつつ。

「おい、何だ今の悲鳴は」

「目の前の山賊二人を始末しろ」

見張りの悲鳴を聞きつけて現れた山賊に僕は作りたてのアンデッドをけしかける。

「ちよっ、お前どうし……」

「ひっ」

胸を潰されたアンデッドへ山賊の一人が声をかける隣で顔面を潰されたアンデッドの姿を見た山賊が息を呑む。

（さあ、悪夢の始まりだ……）

B級ホラー映画か何かを地で行く光景を繰り広げる山賊アンデッド達と犠牲者を見ない様にしつつ——現実逃避を兼ね、僕は胸中で呟いた。ああ、スプラッター。



## 第十一話「復讐者といっしょ」(後書き)

いやー、正義の味方とは間逆というか、今回は実に『冥王』らしい活動になっています。

この分だと、どうやら活動拠点ゲットは『冥王』側の方が早くなりそうですね。

次回もこのまま山賊アジト攻略戦の予定。

もちろん続きますよ

## 第十二話「屍達の中で」

「おがぁ、ちゃーん」

「ひ、ひいっ……寄るなぁ」

「お頭、お頭ぁ！」

混乱し恐怖から逃げまどう山賊達の悲鳴があちこちから響いてくる。ひよっとしたらアンデッドを見たのも初めてなのか、思った以上の取り乱し様だった。

（まぁ、自分の殺した相手の死体が動き出して襲ってきたら、怖いなんてモンじゃないだろうけど）

僕はこの混乱に乗じて城塞内を歩き回っていた。目指すは地下だ。（中庭にはなかったし、城塞の外にもなかったから――）

探しているのは墓地。目的は、まあお察しの通りとでも言うんだろうか。

（戦闘で人が亡くなることも多かったろうし、外部に捨てるとか野ざらしにするしかなかった可能性もあるけれど）

名のある将や城主の墓ぐらいはあるのではないかと踏んだのだ。

（埋葬品や首目当てに荒らされてたとしても、地下牢とかもあるかもしれないし）

無駄にならないと信じたい。

「に、しても……」

ずるずると足を引きずりながら僕の数メートル後ろを歩くのは、山賊のアンデッドが数体。

（心臓に悪いよなぁ、味方だとわかっていても）

近くにいれば細かい指示を出せるし、中でバリケードを築かれるなど進むのに人手が必要になることを考えて連れてきたのだが、はつきり言っって怖い。

（気にしちゃ駄目だ。とにかく今は先に進もう）

うめき声とも唸り声ともわからないものを時折洩らす動く屍ゾンビをな

るべく見ない様にながら、僕はたまたま見つけた階段を下り始めた。

「誰か、助けて」

「やかましい！ 逆らうんじゃねえっ！」

（っ、ビンゴか！）

女性の悲鳴と怒鳴り散らす男の声が聞こえたのは、階段の下。駆け下りても足音を幻影が無効化してくれるというのは実にありがたい。

「そこで待て」

ただし、ゾンビ達がついてきてはせつかくの透明化めくらましもあまり意味がなくなってしまうだろう。階上で待機する様アンデッド達に命じ、僕は畏に気をつけつつも階下へと急いだ。

「もうここはおしまいだ、化け物が襲って来やがった……」

階段を下りる間もわめき散らす男の声は、男の目的を雄弁に語っている。

「さっさと逃げねえと危ねえんだよ！ てめえらだって死ぬよりか奴隷の方がマシだろうが」

（なるほど。仲間を見捨てて掠った人達を連れて逃亡、虜囚を奴隷商人にでも売って再起を図るって辺りかな）

僕はこの状況をチャンスと判断した。

（さて、上手くいけば複数の人を救出できる）

「それとも、逆らってその奴みてえに死ぬかあ？」

（っ）

歯がみしたのは一瞬だけ、救えたかも知れない相手を救えなかったことを悔やみながら階段を下りきった僕は見た。階下に広がっていた光景を。

（予想通り、地下牢があったのか）

鉄格子がはめられた頑強そうな作りの石牢が左右に二つずつ。内一つは格子脇の扉が開けられていて、扉の側で少女の手を掴み引きずり出そうとしている男が一人。奥側の牢には囚われていたのであ



ろう人々の姿。

（あの男が言っていたのは、多分――）

周囲の撫でる僕の視線が次に向いたのは、手前の牢に枷をはめられてぶら下がる男の骸。旅行者らしい身なりの衣服はボロボロになり既に事切れているようだったが、つい先ほど死んだという訳ではなさそうだった。

（牢に入れっぱなしなのは、囚われている人達への見せしめかな）  
ともあれ、これでだいたいの状況は把握した。

（じゃ、一芝居打ってみるか）

僕は一端物陰に身を潜めると、透明化を解きゴミ捨て場から拾ってきた『奥の手』入りの壺を蓋の開いた状態で放置し、男達の前に歩み出た。

「仲間を見捨て逃げるとは、実に薄汚い性根よ」

「な、なんだてめえは！」

見慣れぬ人物の乱入――僕の姿に警戒しつつ山刀を鞘から引き抜いた男が誰何の声を上げるが、質問には無視を決め込み一つだけ端的に要求する。

「その手を離せ」

第一の目標は、僕が囚われた人々を救いに来たものと錯覚させること。実際助けには来たのだが、目の前の男には少々して欲しいことがあった。

「ふ、ふざけやがって！ ああん、正義面してこいつ等を助けに来たってか？」

（よし、ここまでは想定通り）

否定するでもなく肯定するでもなく、黙ったまま僕は一歩足を前に踏み出す。

「おっと、それ以上動くなよ？」

「きやあつ」

警告を発し、少女を引き寄せた男が山刀を少女に突きつけるところまでも予想通りの行動だ。

「へへっ、そうだ。てめえは、そのまま立ち止まってる。こっち来んじゃねえぞ」

「良からう、我はここに立ち止まろう」

僕の宣言に男が笑みを浮かべたのは、人質を取れば何も出来ない  
と確信したのだろう。

「我はな」

もっとも、男は気づかなかったらしい。見せつけに放置されていた男が偽りの命を与えられ動き出す機会を狙っていたことに。

「うおおおおっ！」

「なっ」

枷がはじけ飛び、少し錆の浮いた格子を雨細工の様に曲げた生け  
屍は僕の横に立つと人質を取った男に刺す様な視線向けた。

「名乗り遅れていたな、我は『冥王』。生と死の道理をねじ曲げ、死者を使役する者」

「んだと？　じゃ、あの化け物はてめえが……」

ここに来て、死者達が襲撃の理由に男はようやく気づいたらしい。  
「いかにも。さて、見ての通り、我が僕と化した死者は常人ではあり得ぬ力を発揮する。本来人間が己を壊さぬ様抑えている力を限界まで引き出すことが出来る訳だ。もっとも、そんな使い方をすればすぐに壊れるがな」

「そ、それがどうしたってんだ？　こっちには人質が」

生ける屍の剛力に怯えつつも男僕が何を言いたいかも気づかず、  
山刀を突きつけた少女を前に押し出して威嚇する。

「やれやれ、一から十まで説明せねばならぬとは、馬鹿は困る」

嘆くふりをしつつ僕は天井を一瞥すると、山賊の男に説明をして  
やった。

「汝がその女を殺せば、次の瞬間我が僕と化した女によって汝は殺  
されると言うことだ。この新しき僕は男だが、力がどれほど増すか  
は見たであろうに」

しかも僕の横に立つ生ける屍は一息で男に飛びかかれる位置へ既

に立っている。

「女がし損じてもこの僕が居る。人の身で僕二人を相手にできるなら別だが……だから、親切心を持って忠告してやったのだ」

男が人質を取った時点で新しく作った僕はまだ牢の中、少女をこちらに突き飛ばして逃げれば僕が何らかの力を持っていても少女の身体が盾になり、生ける屍が襲いかかれる範囲に男のみが置かれることもなかったのだ。

「じゃ、じゃあてめえはこの女の命が惜しかった訳じゃ……」

「その問いに、我は答えたか？」

思い切り邪悪な笑みをつくって、僕は言ってる。

「畜生っ！」

「きゃあっ！」

（上出来だ）

僕の説明が微かに頭にあったのだろう。脅威は二人より一人の方がいい、少女を盾にすれば助かる確率が高くなると吹き込まれた男は、少女をこちらに突き飛ばして走り出し。

（ゆけ）

僕は声を出さず『奥の手』に指示を出す。それは、死した虫のアンデッドで自立する発信器の様なもの。体内で毒を精製することができる為、殺傷能力も持ち合わせている。

（参謀殿、今から逃げ出すであろう山賊の一人は敢えて逃がしてください。城塞内のアンデッドには僕から指令を伝達させますから。

問題の山賊の容姿は――）

「っ痛……」

声に出さず外の参謀殿に伝言を送ると、僕は身を起こそうとする少女に近づいた。

（これで上手くいけば今後は『冥王』相手に人質をとる輩も減るだろう。問題は、こっちだけど）

「あ……ひっ、た助け……」

僕からすれば策の為のお芝居だったのだけれど、少女からすれば

見殺しにする様な言動をとった上死体を操り、自分が死んだら僕に  
するとまで言った相手なのだ。怯えられても仕方ない。まあ、『冥  
王』は成り行きで人々から畏怖されるキャラに固まりつつある事を  
考えると、勘違いさせたままでも良いかもしれないが。

（いや、勘違いして貰うか。この人達がどんな扱いを受けていたか  
はわからないけど、『死んでも下僕としてこき使われる』なんて錯  
覚してくれば自害は防げるだろうし）

ぶっちゃけ、死ぬより辛い目にあったことなどない僕がおこがま  
しいかも知れないとは思ったけれど。

（『生きていれば良いことがある』なんて言う資格はないかも知れ  
ないけれど）

生きていて欲しい、と心で思いつつ。

「立て、女」

口から出したのは出来るだけ冷酷っぽさを演出した声。

「下僕が死者のみではつまらん。身の回りを世話する者も探してい  
たところだからな。戯れに飼ってやろう」

僕としては村に返すか保護すべきか迷っていたのだが、城塞はま  
だ完全に制圧したわけでなく、こうでも言わないと冷酷非道な『冥  
王』がこの人々を生かしておく理由が説明できない。

「汝等はここの生者を守れ」

山賊ゾンビとリビングデッドに僕は指示を出すと罍除けのアンデ  
ッドを前に出しつつ、透明化を施し直して階段を上り始める。階下  
の人達には完全に誤解されただろうが、地下牢にいた虜囚は出来る  
限り救うことが出来たのだ。

（あとは厨房と頭の部屋とかかな、捕虜が居るなら）

「ひえええ、おた、お助け」

ひっきりなしに聞こえた山賊の悲鳴も時折ぽつぽつ聞こえるだけ  
になってきたと言うことは、アンデッド達が頑張っているのだろう。  
（これだけ悪行を重ねていたなら首に賞金とかかかっているの良さ  
そうだよなあ）

上手くいけば資金も手に入り、本格的な拠点が出来る。

（とりあえず、厨房経由で頭の部屋か）

時折すれ違うゾンビをあまり見ない様にしながら、僕は目についた扉を開ける様に異除けアンデッドに指示を出した。

## 第十二話「屍達の中で」(後書き)

城塞攻略、次はいよいよ「VS山賊の頭」の予定です。

まあ、ゾンビの物量で力押しできそうな気がしますけどね。

『冥王』は無事城塞を手中に収められるのか。

続きます。

### 第十三話 「ネクロマンサー・ダイエット」

僕が霊体のアンデッドではなく実体のあるアンデッドを今回の城塞攻略に用いたのは、罨を警戒したからだった。

（狙いは悪くなかったと思うんだけど）

死体、血、死体、血、血。苦手な者があちこちで目につく光景に吐きそうにはなるわ、精神ダメージを受けるわで僕はこの時相当ブルーになっていた。

（よく考えればこの城塞、拠点に使うなら後かたづけもしないと行けないんだよね）

気が滅入る。もちろん、作業の大変は今日作った山賊のゾンビ達にやらせるつもりだ。

「食が進まず、必ず痩せます。ネクロマンサー・ダイエット!」

現実逃避にふざけてみるが、僕の山賊アジト攻略戦はまだボス戦が残っている。

「お頭あ、駄目だこいつら。殴っても斬っても死にやしねえ」

「やめろ、来るな来るなああ!」

「お頭、このままじゃ」

せっぱ詰まった声と怒号や悲鳴、戦いの音を頼りに進めば、足の骨を砕かれたのか這いずる白骨の姿を見つけて。

（ああ、せめて自己再生能力付きにしておくべきだったか）

作成したアンデッドのレベルを抑えたことで、アンデッドに被害が出ていたことに僕は驚き、少し反省する。

「君は確か……」

スケルトン

足を砕かれていた動く白骨はこの城塞を根城にした山賊の犠牲者で掠われた家族を助けようと潜入し、返り討ちにあったと当人に聞いている。その分ある程度の自我を持たせ、アンデッドの指揮官役にと仲間内のもめ事で殺された山賊のスケルトンよりハイスペックで作成したはずだったのだが。

「なるほど、罨にやられたのか」

頷く白骨を横目で見ながら視線を巡らせれば、半開きの扉が視界に入り。

（ちよつと寄り道してみるか）

ここで待っていてねとスケルトンに言い含め、罨除けのアンデッドに命じて先行させる。中で山賊が待ち伏せているかも知れない。

（まあ考え過ぎかもしれない）

自分の考えに苦笑しつつアンデッドの開けた扉の奥を見た僕は、一瞬言葉を失う。

（都合がよすぎじゃないかなあ）

開け放たれた扉の向こうは武器庫だったらしい。アンデッドの襲撃に慌てて武器を取りに行った山賊が扉を閉め忘れでもしたのだろう。長剣、短剣、斧に弓。

「鎧まであるや」

ひょっとしたらもとは城塞に詰めていた兵士用のものだったかも知れないが。

（鉄のブーツを義足代わりにすれば、多分歩けるよな。いや、いつそのことちよつと改造するか）

スケルトンを動かす核である魂を転用すれば、上位のアンデッドに強化するのも難しくはない。

「魂だけ鎧に移して生ける甲冑にするか、彼に鎧を着て貰って白骨スケルトン  
ラファイター戦士にするか……」

どちらにしても戦闘力は飛躍的に向上する。もともと、ベースのスケルトンは生前が村人であることを考えると本来のそれに色々と劣るだろうけれど。

（いや、劣るんだったら育てれば——）

モンスターを仲間に出来るゲームで仲間モンスターのレベル上げをした記憶がふつと浮かび、僕は思いつきを実行すべく歩き出す。

「そう言うわけで、取引という形で申し訳ないんだけど……本懐を果たしたら僕の仕事を手伝ってくれないかな？」



実戦経験を積むと強くなるという特性を組み込むこと、戦闘力向上の為に武装して貰うことなどを説明し、素の口調で僕はスケルトンを勧誘する。この城塞の山賊達とは違い長い付き合いをして貰いたかったからだ、何故なら。

（周辺の村の村人なら囚われていた人達と付き合う時のクッションと言うか橋渡し役になってくれるかもしれないし）

もちろん、橋渡し役時は幻影を纏って生前の格好をして貰うつもりで居る。

「最終的にはこの城主名代を任せるかも知れないけどね」

ざっと説明して、僕は返答を待った。この間も先ほど戦闘音のしていた辺りからは怒号や悲鳴、断末魔が聞こえてくることから戦闘は継続中なのだろう。

「そう、ありがとう」

視線を戻した僕はスケルトンがゆつくりと首を振るのを見届け、感謝の言葉に続いて施術に入る。

（一応最終的には留守番任せるんだからある程度高性能で――）

ネクロマンサーの力で自己再生能力を与え、闇の力で初歩の暗黒神聖魔法を使用可能にする。実戦経験を積むことで強化されると言う能力には、おまけに一定以上の力を得た場合上位アンデッドに成長できる能力をつけてみた。

「どうかな、問題なくできたと思うけど」

「ええ、ありがとうございます」

僕が口にした言葉に舌も声帯もないのになめらかな礼の言葉が返ってきた時、既に強化は終わっていた。

「貴方は姉を助けて下さいました」

「じゃあ、地下牢の人の中に」

スケルトン・ファイター

無言で頷いた白骨戦士は地面に転がった長剣を拾うと立てかけてあった皮製の盾を装備し。

「行きましょう、微力ながらお力に」

踵を返して歩き出す。

「あ」

「どうしました？」

「いや、なんでも……」

スケルトン・ファイター

白骨戦士へはそう返しつつも僕は一つの失敗を悟る。鉄のブーツは歩きたびガチャガチャと五月蠅いのだ。

（これじゃ、近づいてますよって言うようなものだよね）

まあ、山賊の武器庫にあったと言うことで今回は味方と勘違いしてくれるかも知れないが、隠密行動の同行者には相応しくないだろう。

「何にしても、まずはここの制圧だ。罾には気をつけてね」

「うっ……ぜ、善処します」

歩みを止め微妙に引きつった声を返してきた新たな仲間へ、僕は生ぬるい視線を向けながら歩き出す。

「こっちだと思うけど、山賊には出くわさないね」

「そうですね」

ゾンビ達の戦果か、前衛ががちゃがちゃ鉄の靴を鳴らして進んでいると言うのにいっこうに敵の姿はない。味方というか、ゾンビなら何体も見かけはしたが。

「そもそもこの城塞の規模と聞いた噂の割には山賊の数が少ない様な……」

この時僕が思い浮かべたのは、村へ襲撃中で拠点が手薄になっていた可能性。

「考えられますね」

スケルトン・ファイター

白骨戦士は僕の懸念に同意して。

「私の故郷も心配です。急ぎましょう」

靴のがちゃがちゃをいっそう五月蠅くしながら鉄と骨で出来た戦士は戦闘の音を頼りに駆け出した。

「音がしてたのはこの角を曲がっ」

曲がった先、と言いたかったのだと思う。

「これは……説明とかに時間割きすぎたかなあ」

スケルトン・ファイター

絶句した白骨戦士の見た光景は、僕の見たものと同じ——山賊ゾンビ数体に群がられ、満身創痍になりつつも斧を振るう頭らしい山賊の姿。

「止めよ」

『冥王』モードでとっさにゾンビ達を制止しなければ、多分山賊の頭は部下だったものに殺されていたんじゃないだろうか。

「無様な有様よな」

内心はやりすぎたと一筋の汗でも垂らしたいところだが、『冥王』におふざけは要らない。と言うか許されない。

「や、やかましい！　なんだてめえらは」

「我は『冥王』。生と死の道理をねじ曲げ、死者を使役する者」

虚勢を張りつつも怒鳴りつけてきた山賊頭へ、動じぬ風を装って僕は名乗る。

「死者を操るだと？」

「見ての通りだ、現に汝が部下達は我が命によって汝に刃を向けたであろう？」

そもそも、僕の仕業でなければゾンビ達は制止の声を聞き入れなかっただろう。

「くっ、な、何が望みだ？」

僕の実力をかいま見、かつトドメを止めたことで交渉の余地が成り立つとも思っただろう。だが、それは思い違いというもの。

「望み？」

「へ、へへ……か、金か？　女か？　それとも」

僕の問いに山賊頭は誤解を深めた様だったが。

「愚かなり」

「はっ？」

「汝が根城をあっさり陥落せしめし我が力。振るえばそのようなものいくらでも手に出来よう？」

もちろん、そんなことをする気は更々ない。

「そもそも、汝が言う金も女もこの城塞が落ちた今、手にしているは我であろう？」

「うぐっ、だが俺にゃ今村を襲ってる部下もいる。野郎共が戻ってこりゃ」

「既に金も女も得た、もっと欲しかったとしても戻ってくる汝が部下をだまし討ちにして奪い取れば良いだけのこと」

「……じゃ、じゃあ何だってんだよ？」

譲って貰う必要もないと暗に言い、聞き返してきた山賊頭に僕は告げる。

「我が望むは害虫の駆除。まずはここに一匹――」

「は？」

聞き返してきた山賊頭は気づいただろうか。小さく頷いた白骨戦士<sup>イター</sup>が一步前に足を踏み出したことを。

「そして、余興。初陣、見事勝利で飾って見せよ」

「はっ」

「ぬおっ?! ほ、骨が動い――」

斬撃を急に見舞われ、傷ついた身体でとっさに受けたのは流石と言うべきか。

「そを退けること叶わば、今回は汝を見逃そう」

「なっ、ほ、本当だろうな？」

「『冥王』に二言なし」

僕の言葉で命が助かるかも知れないという希望を見いだした山賊の頭は息を吹き返し。

「ただし、そを倒すことなく逃げれば、汝が元部下がどこまでも追いかけて汝を滅ぼす」

僕は釘を刺した後、一步退いて見届け人となる。

「へっ、上等だぁ。こんな骨野郎俺の斧で」

言いつつ山賊頭の振るった斧が、皮の盾を半ばから断つ。

「次はその兜をたたき割ってやらあ！」

僕が見る限り、傷だらけとはいえ斧の動きに遜色はない。だからこそこれまで山賊の頭を張ってこられたのだろう。

「おらあつ」

振り下ろされた斧が兜は逸れたものの、肩口から鎧ごと肋骨を断ち折りながら振り抜かれ。

「は、ははは……どうだ、倒したぞ！ 約そ」

僕の方を見ながら血まみれの顔で笑った山賊頭の顔が固まった。直後に口から大量の血を吹き出して。

「白骨戦士を倒すなら四肢を狙うべきであつたな」  
スケルトン・ファイター

胴を長剣で貫かれ、崩れ落ちた骸を僕は冷ややかな目で見る。とりあえず、これで城塞は制圧したと見て良いだろう。

「肉を切らせて骨を断つ……いや、骨を断たせて肉を貫く、になるかな？ ともあれ、見事だったよ」

「ありがとうございます」

「うん」

新たに加わった仲間を労い、礼の言葉に浮かべた笑顔を僕はすぐに引っ込めて。

「ただ、のんびりもしてられないんだよね」

呟きながら声に出さずに参謀殿を呼ぶ。

「出払ってる山賊達を何とかしないと」

こちらの使える戦力は山賊のゾンビ達と参謀殿、僕も動けると言えば動けるが。

（村の一つはフィーナと勇者のみんなにお願いしても良いかな）

流石に疲れるなあと胸中でばやきながら僕は参謀殿に連絡と転移魔法による転送を頼むのだった。

### 第十三話「ネクロマンサー・ダイエット」(後書き)

『冥王』の腹心候補登場。

フィーナと参謀殿に続いて三人目ですが、実力は遠く及ばず。成長して化ける子なので長い目で見てあげて下さい。

そんな訳で次回からは村防衛戦を『戦乙女』と『冥王』両パートで行って行く予定。

では、続きます。

## 第十四話「裏と表で」

「ごめんね、昨日の今日でまた――」

「いや、昨日の奴らにしろ話の山賊にしろ人事じゃないからな」

村の防衛を快く引き受けてくれた勇者達へ、僕は恐縮しつつ頭を下げていた。一応僕も昨日今日と連戦の上、つい今し方まで城塞の制圧戦に参加していたとはいえ、これは『冥王』としての活動だし、昨日の戦闘と言うか邪教集団撃退も自分だけソロで行っていた手前、自分から主張するのは気が引ける。

（さぼっていた訳じゃないけど、みんなの前で戦ったことはないからなあ）

ついでに言うなら今回も僕は勇者達とは別行動なのだ。まあ、防衛する村が複数に及ぶ以上仕方ないとは思うのだが、素人同然の剣の腕を見せずに済んでいると言う意味では助かっていると言えるのだろうか。

（よくよく考えると剣を持って戦えないってのは『戦乙女』として拙いよなあ）

かといってゲームの太刀筋を参考に幻影を纏わせる訳にもいかない。与えられた僕の力を最大レベルまで活用すれば幻影を現実と錯覚させてダメージを与えることも出来るけれど、毎回同じモーションで斬りかかるなんて現実としてあり得ないし、そんなワンパターンな太刀筋で相手がばったばったと倒されたら不自然すぎる。

（いっそのこと暗黒神聖魔法の攻撃魔法に槍の幻影でも被せて後方から援護射撃に徹してみるか……）

戦乙女ヴァルキリー・ジャベリンの投槍、とでもすればかっこいいかも知れない。

（けどなあ、ひたすら槍を投げる戦乙女と言うことになるのかっこいいと言うより滑稽な気がするんだよな）

そう、投げるのが単発でトドメ的なものなら絵になるだろう。だが、ひたすらバカバカ投げつけてとなるとどう考えてもギャグシ

ーンにしなければならない。

（とりあえず、打開策は次までの宿題にしよう。時間もないし）

僕は勇者達に気づかれぬ様、密かに嘆息すると勇者達の側に佇んだフィーナに向き直る。

「フィーナ、悪いけど勇者のみんなとこの村のことお願いね？」

時間的な余裕もない。色々と話さなければならぬこともあったが勇者達の前で言える話ではない以上、僕に出来たのは珍しく自分から抱擁したことと耳元でそっと囁いたことだけ。

「また、あとでね」

「は、はいっ」

驚きの表情が去った後、顔を真っ赤にしながらコクコク頷いてくるフィーナに微笑んだ僕は、声に出さず参謀殿を呼ぶ。

（参謀殿、転送をお願いします）

城塞で作った山賊のゾンビ達も数班に分けて魔導死霊<sup>リッチ</sup>たる参謀殿の転送魔法で先回りさせ、襲撃部隊の通り道に伏せさせてある。現在地の後方にある村は勇者達に守って貰い、ゾンビ達で防衛の手が回らない村二つを僕と参謀殿が分担して防衛するという寸法だ。

（色々頼んで済みません）

少々参謀殿には色々して貰いすぎの様な気がするが、僕が力をなすべき使わない様にした場合、何処かにしわ寄せが行くのは当然で。（何、お前さんと一緒に居ると退屈せずに済むものの。しかも善行も積めるときておる）

（善行を積む？）

（うむ、長い話になるのでな、おいおい話そう。それよりも）  
楽しそうな口ぶりの参謀殿は、鸚鵡返しに問うた僕の質問に答えながら僕の身体を別の場所へ一瞬で移動させる。

（先に仕事、じゃろ？）

（ああ、そうですね。今は山賊の襲撃を阻止しないと）

一瞬で変貌した景色の中に、先ほどとは違う荒廃した村を認め、僕は幻影を纏って姿と気配を完全に消した。邪教集団撃退時と同じ



で芸のない戦法だが、逆に言えば繰り返してしまうほど効果が見込めるということでもある。

（はじめてのひとごろし、かな）

ここまで僕は間接的にしか人を殺していない、邪教の徒も怪我はさせたが殺さずに追い返している。

（けどなあ）

城塞で仲間には殺された魂から山賊の所行を直に聞いて尚、『罪を憎んで人を憎まず』をやる気にはなれなかったのだ。山賊達の犠牲になった村人や旅人のことを思うとやりきれない。

（城塞があっちだから、来るなら正面の林道からか）

林の向こうに少しだけ見える城塞を横目で見た僕は林の中に足を踏み入れ。

（ん？）

物音を耳にして振り返る。

（子供？）

足下に目をやる人影は背が低く、少なくとも僕にはそう見えた。

林に薪を取りに来たの村の子供だとしたら、何というか間が悪すぎる。

（さて、どうしたものか）

村に戻って貰うなら透明化を解くべきだろうが、ここには戦乙女として来ている。警戒心を抱かせない様にするなら、素の姿でなく武装を解いた戦乙女の姿がベストだろう。

「ねえ、キミ」

透明な姿から少女へと姿を変え、僕が子供らしき影に声をかけた瞬間。

「おい」

林の奥から野太い声がして。

「ホラ、村の連中じゃねえじゃねーか」

「っーか、女だぜ女あ」

「よお、嬢ちゃん。ちーと、俺らにつきあえや」

振り返った僕が目にしたのはいやらしい笑みを浮かべた柄の悪い男達。

（最悪……のタイミングで出くわしたもんだなあ）

「おい、なかなか上物じゃねえか」

「だなあ、村の女なんぞより——」

好き勝手なことをのたまう山賊達を前に、僕は胸中で嘆息した——  
今日は厄日だと。

## 第十四話「裏と表で」(後書き)

戦乙女のピンチ到来。

村人と思われる子供が側にいるこの状況下、果たして戦乙女は山賊を撃退できるのか。

という訳で続きます。

## 第十五話「戦乙女の厄日」

「聖なる光よっ！」

「ぐわっ?!」

幻影の力を応用して僕の放った閃光が山賊達の目を灼く。

（まずは先手必勝っ）

子供らしき人影が側にあった手前、自分の力をどこまで使うか一瞬迷ったものの、耳が汚れそうな山賊達の戯言を聞くのは苦痛だったのだ。

（そして、子供を連れて逃げ）

何というか、城塞で死んだ山賊の魂に行った情報収集が軽くトラウマになっているのかも知れない。何にしても子供を巻き込まないところまで引き離してからと自分自身に言い訳しつつ戦略的後退を図ろうとしたのだが。

「ウキヤーツ！」

近寄ってみれば、僕が子供と思ったのは猿に似た醜惡な顔を持つ人型の何かだった。

（って、ええ?!）

光に驚いたのか錆びたナイフを構え威嚇するそれに一瞬固まったのは僕のミス。

（ああ。魔法の存在するファンタジックな世界だし亜人種<sup>ゴブリン</sup>っぽいものが居ても不思議はないか）

「うぐっ、あの女<sup>アマ</sup>どこ行きやがった」

初めての亜人遭遇に深い感慨を抱く間もなく、閃光で一時しのぎした山賊の声が後方から聞こえる。まさに前門の仮称ゴブリン、後方の山賊。

（子供でないとわかっていたらこんなまどろっこしい真似しなかったのになあ）

無力な村人がこんな状況に置かれれば大ピンチだろう。しかし、

僕には対応手段がいくつもある。たとえば透明になって一方的に攻撃をしか

(……ん？ 透明？)

「いやがった。てめえ、訳のわからね……なっ？」

「キャ？」

そう、姿を消せばいいのだ。ゴブリンにも山賊にも一瞬惚けた少女が手をポンと打つなり姿を消した様に見えたことだろうが、僕は遭遇した山賊を生かして帰すつもりがないのだから姿を消せると知られても支障はないはず。

(残る問題はゴブリンっぽいものだけど……さて、どういう反応をするかな)

ゴブリンの方は光で驚いたからこちらを威嚇しただけで本来人間に敵対しない可能性も僅かに考慮して、山賊の態度で対応を決めることにする。良いゴブリンなら加勢して山賊を倒せば良いだけだし。(まあ、錆びたナイフ持っている時点で友好的な可能性は低そうだけれど)

「ゴブリンだと？」

「キャキャーッ！」

僕の推測を肯定するかの様に山賊は顔をしかめ、ゴブリンは自身との遭遇に戸惑う山賊達へ飛びかかる。

(顔をしかめただけで襲いかかっていると見ると、倒しちゃっても問題なさそうだな)

目の前のそれゲームや小説で得た知識のものとどこまで近いかはまだわからないけれど、細かいことは後で参謀殿にでも教えを請えればいいだろう。

「がっ。こっ、この……」

僕がそんな風に初遭遇した亜人に対する方針決めている間も、先手をとられた山賊はゴブリンに押され、腕や二の腕に浅い傷を作っていた。普通に考えれば体格や身体能力の差から山賊の方が勝ちそうだが、虚をつかれたことと襲いかかれた山賊の装備が

災いした。

（ハンマーじゃあなあ）

苦戦する山賊が手にしていた武器は両手持ちの槌。俊敏な相手と戦うのは不向きであり、長所になりそうなりーチの差も先手をとられ懷に飛び込まれた時点で短所になってしまっている。

（せめて一人じゃなきや状況も変わったんだろうけど）

めくらまし  
閃光で僕の姿を見失った山賊達は周囲を手分けして探そうとしたのだろう。その結果、この山賊は一人でゴブリンに遭遇し、襲われたという訳だ。

「キャツキヤー！」

ゴブリンはゴブリンで相手が一人、しかも一瞬の隙をつけたこととその後の山賊が防戦一方になったことに気を大きくしたのか狂った様に攻撃を仕掛けている。

「おい、何があっ」

「ご、ゴブリン?!」

もっとも、ゴブリンの優勢は調子に乗った自身の鳴き声や戦闘の音を聞きつけた他の山賊が集まってくるまでだったけれど。

「てめえ、害獣の分際で」

「やっちまえ」

怒号をあげながら山賊達が殺到し、ゴブリンの断末魔が林に響く。案の定というか、山賊数人を相手にした時点で結果は見えていた様な気がする。

「つたく手間をかけやがって」

「すまねえ、助かった」

（まあ、人数差を考えればこうなるよなあ）

戦いを終えた山賊達のやりとりを眺めつつ、僕は密かにアンデッド精製の魔法をゴブリンの骸に施し、襲撃させるタイミングを見計らう。

「しかし、なんでゴブリンがこんなところに」

山賊の一人が口にした疑問はこちらも知りたいことだったが、ゴ

ブリンの魂とも意思疎通は出来るものなのだろうか。

「さあな、どこから流れてでも来たんだらうよ」

「けどよお、こんな村の近くに居るんだぜ？ 村の連中が襲われてでも居たら最悪手ぶらで帰ることになんねえか？」

フンと鼻を鳴らしそっぽを向いた山賊に村とゴブリンの骸を交互に見つつ問いかけた山賊……まどろっこしいなあ。とりあえずそっぽを向いたのが山賊Aとして、問いかけた山賊Bの疑問に答えたのは、別の山賊だった。

「そいつぁねえよ。ナイフ持ってるのとこ見るとこいつは斥候かはぐれってとこだらう」

（おっ、山賊Cはゴ布林に詳しいのか……）

意外なところから手に入った情報に、このまま少し様子を見ると言う誘惑にかられかけた僕だが、ふといやな可能性に気づく。

（つて、斥候で群れがいる場合もあるのか）

山賊退治とゴブリンの群れ討伐の二本立て、ただでさえ連戦が精神的にきついのにこの上連戦とかは勘弁して欲しい。

（と、なるとのんびりしても居られないか）

心の中で弱音を吐きつつも僕はアンデッドとして蘇らせたゴ布林に指示を出し。

「で、どうするよ？ 誰か報告に戻……がっ」

相談の途中だった山賊Cが後ろから皮鎧ごと心臓を貫かれ、崩れ落ちる。使い潰すつもりで自己を破壊しない為生き物が通常かけているリミッターを外したゴ布林ゾンビは、俊敏性と力の双方が生前よりも遙かに増している。

「ひ、ひいっ」

「ば、馬鹿な。こいつは死んだは……」

恐怖し、後ずさる山賊Bも驚き戸惑う山賊Aも気づかない。

（うーん、城塞の規模からして、村を襲撃する山賊って少なく見積もっても一つの村に十人ぐらいいはないとおかしいもんなあ）

遭遇した山賊の少なさに違和感を感じ首を傾げつつ僕が施した魔

法によって死んだはずの山賊Cがゆっくり起きあがったことなど。

「おい、どうした？ さっきのひか」

（なるほど、あの山賊達も襲撃部隊の斥候というか先行隊だったってことかな）

さっきまでの仲間と倒したはずのゴブリンに襲われ、血しぶきを上げながら崩れ落ちる山賊AとBを見て絶句した山賊の向こう。

「うげっ」

「な、なんだこりゃ……」

「ゴブ……リン？」

目にした光景に呆然と佇む十名強の山賊達へ自らの血と殺した山賊達の血で汚れた生ける屍が飛びかかる。  
リビングデッド

（不意もついたし、四、五体居ればこの場は何とかなるか）

山賊達が我に返るまでは一方的な殺戮になることだろう。とにかくここは生ける屍に任せて村に行かなければ。  
リビングデッド

（山賊撃退して村に行ったらゴブリンに襲われて被害が出ましたじゃ目も当てられない）

僕は自らにスタミナと体力を回復する魔法を施し続けながら村に向かって駆け出した。決して殺戮現場の血とかスプラッターが見たくないから逃げ出した訳ではない。

（急げ、急げ……ってえ！）

全速力で林道を行く僕の前に横から飛び出てきたのは、さっき見たのとよく似た何か。

「だあっ！」

「ギキイー！」

ちよつとイライラしていたせいか、気がつけば僕は全力疾走からの跳び蹴りをゴブリンの側頭部にぶちかましていた。



## 第十五話「戦乙女の厄日」(後書き)

敵対亜人登場。

といっても雑魚ですが。

山賊だけかと思ったら村には別の脅威まで迫っていた。  
果たして戦乙女は村を救えるのか。

という訳で、村防衛戦はもう少し続きます。

## 第十六話「過去のお話」

「キィー」

悲鳴を上げたゴブリンが慣性の法則に従って吹っ飛んだ直後。

「冥王くん、こんな時間ときにごめんね」

まるで夜遅く電話をかけてきた同級生の様な一言を僕は知覚していた。

（いえ、いつもお世話になってます）

状況と台詞のギャップに微妙に脱力しつつも、頭の中に響く声には聞き覚えがあった。直に面通したのは一度きりだが、忘れるはずもない。

「は、はじめまして。あなたに授けられた力の一つを司る——」

漆黒の髪を持ち、まだどことなく幼さを残した顔の少女。外見年齢は中学生か高校生ぐらいだろうその少女は、闇の神だと名乗った。

（それで、どういった御用でしょうか？）

フィーナの兼といい、負傷者の治療といい、神オラクルの啓示で語りかけてきた女神を始め、なんだかんだ言って神々の授けてくれた力には世話になりっぱなしなのだ。自然と言葉も敬語になる。

（内心、『冥王くん』って呼び方も微妙だとは思うけど）

（あ、ごめんね。冥王く……あなたには寵愛を与えさせて貰ってるけど、名前で呼んでいいかまだ聞いてないし……）

神々の世界で視線を逸らして頬を染めつつモジモジしているのが目に見えるかの様だった。そう、神オラクルの啓示で交信時、僕の思考は向こうに筒抜けになる。

（あ、いえいえ。こちらこそすみません。僕は——）

故に、迂闊なことは考えられないし。考えてしまった場合、フォーするのにも一苦労だ。

（あ、うん。気にしてないなら良いの）

先方も腰が低いというか神々の願いを僕が叶える為に行動しているというのが根底にあるからか、実際顔を合わせた場合も神の啓示オラクルの場合も互いに恐縮してつきあい始めた恋人同士カップルの様な初々しいというかじれつたい展開になるのがデフォのようなのだが。

（恋人同士？ ……嫌いなら寵愛なんて授けないし、あなたがそう望むな）

（ちょ、ストップ！ すとーっぷ！ 比喩表現ですから。僕にはフイーナが居ますし）

何故僕はこうたびたび墓穴を掘ってしまうのだろうか。筒抜けだと言った矢先であるというのに。

（それより、わざわざご連絡頂いたからには訳があるのでしょうか？）  
（あ、うん。ゴブリンが出てきたことに驚いてたみたいだから、ちよつと説明をね）

闇の女神様が説明されるに、今から随分昔——神々から力を与えられた、僕の先輩にあたる青年が、世界を平和にする前段階として授かった力を行使したらしい。

「外敵がいれば人々は内輪の争いなどとしては居られない筈だ」  
と言う考えのもと、生物を作り出す『生』の力で彼は何種かの亜人種を作り出し、人間に戦いを挑んだ。

（後に、人々は彼のことを『魔王』と呼んだの）

『魔王』が作り出したのは、人間に敵対的だが知能の高い『魔族』、知能が高いが中立的な立場の『妖精族』、知能が低く人間に敵対的な『鬼族』の大きく分けて三種。

（この分類からするとゴブリンは『鬼族』ですね）

（うん。魔王と人間の戦いは最終的に人間側の勝利で終わり、彼の狙い通り人間達もしくはは争うことがなかったんだけど）

平和は長続きしなかったという。『魔族』が戦いの後人間の住ま

ぬ大陸に渡って姿を消したことも理由の一つだったと言うことらしいが。

（なるほどなあ。と、言うことはこの世界には妖精族もまだいるのかな？）

（うん、あなたの感覚だと『妖精族』は異民族みたいな扱いをこの世界の人間からは受けているかな）

異民族という言葉が、昨日思い浮かべた何処かの国の古い英雄像と相まって妙な光景が頭に浮かぶ。

（ドワーフの王を七度捕らえて、七度放して心服させるとか、何処かの国の歴史をなぞる様なことにならないと良いけれど）

それをやってしまうと戦乙女勢力は最終的に滅亡してしまう。

「ウキヤーツ！」

「流石にそれは拙……って、考え事してるんだから邪魔すんなっ！」

いつの間にか起きあがって怒りの咆吼をあげたゴブリンへ僕が反射的に攻撃魔法をぶっ放してしまったのは、仕方がないことだと思う。確かに、何かに蹴り飛ばされ周囲を見回しても姿がなければ、加害者に復讐できずいきりたつ気持ちもわからないではないが。

「ギギヤアアツ」

もとヴァルキリー・ジャベリンころほ

一対象に気の塊を撃ち込む暗黒神聖魔法は、ゴブリンの胸部に命中し肋骨を粉碎。胸を陥没させながら断末魔をあげて倒れ込んだゴブリンを待つ運命は、アンデッドとして自らの仲間を狩る作業。

（つと、そうだった。村っ！）

同族を殺す様に指示したゴブリンゾンビがやって来た方向に引き返して行く姿には目もくれず、僕は透明のまま村に急いだ。

## 第十六話「過去のお話」（後書き）

ちょっと短いですが、今回は闇の神様初登場。

ついでにちょっとだけ世界設定のお話になっています。

説明にあるとおり、中立だった『妖精族』は健在のため、そのうちエルフとかドワーフといったファンタジーにおなじみの種族も出てくるかも知れません。

多分次で村防衛戦は終了の予定。

続きます。

## 第十七話「防衛の後に」

「はぁ、はぁ……」

回復魔法をかけながら走って来たからだろう、呼吸は乱れていたがこんなには知ったのは久しぶりだというのに脇腹が痛くなっていない。

（この様子だと、無事ではあったんだろうなあ）

村は平和そのものだった——と言うと語弊があるものの、ゴブリンの襲撃は受けていない様だった。憔悴した顔、城塞の方に向けた視線に宿るおびえの色の双方が山賊達への憤りを再燃させる。

（子供と女性の姿が殆どない……あ）

おそらく、山賊に掠られたのか逆に掠られない様隠しているのだろう。そう、よくよく考えてみればここは山賊に被害を受けている村なのだ。

（普通この状況で幼い子供を一人、薪拾いに行かせはしないよなあ）  
にもかかわらずゴブリンを子供と勘違いし、姿を現してしまったのは完全な僕のミスだ。

（ああああ……やらなくてもいい様なポカミスを）

自身のぼかに思わず頭を抱えたくなりなるけれど、ここでただ凹んでいるわけにも行かない。

（とにかく村人にゴブリンの事は伝えておかないと）

林のゴブリンの何割かはアンデッド化した仲間に駆逐されてる真っ最中だろうが、この辺りについては一応僕なりにシナリオを考えている。

「大変です、向こうの林で醜い猿のような顔の化け物と柄の悪そうな男達が」

殺し合いをしている、と旅装束を身に纏った少女が村長の家に飛び込んで来て、ゴブリンが近くに居ることと山賊が近くにいること

を伝え。

「なんじゃと?! 娘さん、詳しい話を――」

驚く村長に作り話を交えて少女は説明する。説明を聞き終え、暫く警戒して林に近寄らなかった村人達だったが、一人の村人が林に入っただけで見て見ると、そこには全滅した山賊とゴブリン達だ。

「村長お、大変だ。林の様子を見てきたんだけど」

「こら、あれほど危険だから近寄るなと言っておいたじゃろうが!」

「けどよお、あの娘の言うとおり――」

双方が殺し合って最終的に共倒れになったのだらうと推測した村人が村長に報告し、それから暫くすると山賊は姿を見せなくなりました。

(問題はここからどうするかだけ)

この村が自治しているのか何処かの領主に支配されているのかも話しは違ってくるのだが、あの城塞を『冥王』として拠点にするなら周囲の村々との接触は避けては通れぬ道となる。

(そもそもこの辺の領主とかが出てきて、「あの城塞も自分の持ち物だ」とか主張されたら)

周辺の村を荒らす山賊を放置しておいてたくせに山賊が片づいたとたん出てきて、城塞を明け渡せなどと図々しい物言いをする。

(普通に考えれば山賊を撃退したと言うことは、山賊より強い存在だということだから山賊に手も足も出なかった人間が高圧的に出てくる事なんて……)

ないとは思いたい、僕が生まれてからこの世界に来るまで過ごしていた場所でもエキセントリックというか、明らかに頭の作りがおかしい人は存在したのだ。

(それならそれで売られた喧嘩を買ってしまうのも手かなあ)

振り返りにして逆にその領主のもつ土地を奪い、支配下に置く。

そして、今まで山賊に苦しめられてきた村民を保護する、これがプランA。

（領主が居なければ、これから守ってあげる代わりに領民になって貰うとか）

プランAに近いこれがプランB。どちらにしても拠点にするなら周囲の地盤固めは確実にしておく必要がある。

（どっちの形でも『冥王』は領土と領民を手に入れることが出来る。ただし、プラン通りの状況ならだけど）

もし、領主はいるがまともな領主で山賊を放置していたのが討伐できる兵力を有していないなど仕方のない理由であったなら。

（普通に感謝されて「城塞はあげるけど村は駄目だよーん」とか言われるパターンが一番厄介だよな）

僕の性格的にもこの対応で来られたら引き下がるしかない。悪人以外にこちらから喧嘩をふっかけて全てを奪い去るというのは流儀に反するのだ。

（そう言えば何処かの英雄も城主の座を譲られたとき断って後で苦労したっけ）

何故だろう、ことごとく何処かの国の古い英雄を主役にした演義ものが時折頭を過ぎるのは。

（まあ、後は出たとこ勝負で良いか。最初から全てが上手くいくはずないんだし）

こういう時こそポジティブに考え動くべきだろう。

（……て、急に村の中に少女が現れたら変だよな）

とりあえず目についた民家に飛び込もうとしてようやく一つの問題があることに気づいた僕は慌てて来た道を引き返し。

（急がないと、テイク2っ！）

村の入り口から少女の幻影を纏った姿を現した僕は全速力で駆け出した。

「た、大変です！ 大変です！」

注目を集めるべく大変を連呼しながら目を見張る村人を捕まえる  
と、村長の家がどこにあるかを聞き。

「大変です、向こうの林で醜い猿のような顔の化け物と柄の悪そう



な男達が」

駆け込むが早いか、作戦を実行に移した。

「むう、それは災難じゃったの」

「全くですよ」

参謀殿から村の防衛に成功したという話を聞き、偵察用に放った虫のアンデッドによって林にいたゴブリンの全滅を知った僕は、もう一仕事済ませて参謀殿と落ち合っていた。

「とりあえず林の方は何とかなったんですが」

林の山賊とゴブリンを全て死体に戻し、偽装工作も済ませてある。「村を支配下に置く領主が居るのじゃろ？」

「ええ」

山賊の代わりに誰かが城塞に住み着いていると言うことは、巧妙に隠しでもしなければやがてバレるだろう。

「話のわからない御仁だと良いのですが」

「まあ、中途半端な報酬で手を引けと言われるよりはお前さんにしてみれば処置がしやすいか」

僕が悪党になりきれないキャラであることは、もう参謀殿には見抜かれているようだった。

「そう言うわけで、あさってにでも接触を図ってみようかと」

「あさって？」

「最初に戦乙女として面談して人となりを探ってみます。僕のところはゴブリンが居て駄目でしたが、フィーナ達のところは『戦乙女』の活動として村を守ってくれましたから」

フィーナ達が倒した山賊を手みやげにすれば門前払いをくらうこともないと思う。門前払いするような人物であれば次の日プランAを実行に移すことになるだけだ。

「じゃ、フィーナ達と合流しましょう。よろしくお願いします」

「心得た」

僕の要請に応え、参謀殿が行使した魔法によって周囲の景色が一変する。

「め、戦乙女様あ！」

こちらの姿を認め、駆けってくるフィーナの姿を視界に収めながら僕は微笑んだ。

「ただいま」

## 第十七話「防衛の後に」(後書き)

派手なアクションもなくあっさりゴブリンが片づいたと思ったのもつかの間。

『冥王』の拠点作りを阻む――かもしれない領主の存在が明らかに。行き詰まる交渉戦か、それとも馬鹿領主を力押しで打ち倒す事になるのか。

そう言う訳で、続きます。

## 第十八話「地方領主」

「じゃあ……お願いね、フィーナ」

「は、はひっ」

若干声の上擦っているフィーナの様子に少しだけ苦笑しつつ、僕は幻影を纏うことで姿を消した。

（村を救ったのはフィーナ率いる勇者一行だからなあ）

一応僕も頑張ったのだが、僕が向かった村を襲撃しようとしていた山賊は表向きゴブリンと遭遇して共倒れになった形になっている。（よくよく考えると、村一つ防衛したなら金一封ぐらい貰えたかもしれないんだよね）

ちなみに参謀殿の方は、転移魔法で一定以上の高さの上空まで山賊を転移させ、あとは重力に任せるという方法で山賊を全滅させたそうでこちらも自分達の手柄だと名乗り出るには不可解な方法の名乗り出るわけにはいかなかった。

（物いりなだけだなあ）

大半がアンデッドと言うことで維持コストがあまりかからないとはいえ、『戦乙女』としても『冥王』としても僕は保護した村人を抱えてしまっている。彼らに食べさせる食料か食料を入手する為の金銭は必要不可欠なのだ。

（豊饒神の力とかだったら何もないところからパンとか出現させられるかも知れないけど）

僕に出来ることと言えば、アンデッド達に開墾させて食料を生産するぐらいだろう。

（あとはなあ……）

もちろん、暗黒神聖魔法で病人や怪我人を治療して報酬を得るとか、傭兵として何処かの戦いに参戦し報酬を得るということも可能だが。

（前者はともかく、後者は一人でやるとススメの涙だし勇者達に協

力を頼むわけにはいかないし)

世界を平和にする為に戦って欲しいと話した以上、金銭目的オンラインの戦いに駆り出すのは、僕としては出来なかったのだ。

(こんなところで躓くなんて……)

まあ、いつまでも凹んでいる訳にはいかない。

「ここで褒賞が貰えるといいね、フィーナ」

「そ、そうですね」

実際村を守った僕達に褒美を出してくれる様な出来た領主だと『冥王』側としての対応がやりづらくなるのは間違いないのだが、今回はあくまで『戦乙女』としての行動だ。出来れば資金は欲しい。

「何者だ」

誰何の声を向けられたのは、フィーナの姿を見つけたからだろう。声を張り上げたのは門番の兵。

「近隣で村を襲っていた山賊を討った者だ。こちらの領主にお目通り願いたい」

僕が耳元で指示したとおりの口上をフィーナが述べ、僕達は門番の反応を待った。門前払いを喰らわせるのか、上と掛け合うのか。

「帰るがいい、領主様は今お忙しいのだ。貴様の様な素性も知れぬ輩を通すわけには行かぬ」

色々想定してきた僕にとって、門兵が非友好的な視線と一緒にフィーナへ槍を向けたことは想定範囲内。カチンときたのは否定しないが、領主の人となりを知る材料を得られはしたのだ。

(とは言うものの、このまま素直に帰ったら子供のお使いだからなあ)

頑張ってくれたフィーナ達にも申し訳ないし、門番の態度だけで全ての判断を下してしまうのも問題だろう。

(せめて領主の顔をお)

「待て」

(ん?)

少し食い下がってみようかと考えていた僕を我に返させたのは、門の向こうから門兵にかけられた声。

「お通ししなさい」

「は、ですが領主様は見慣れぬ者を通すことまかりならぬと」

「時と場合によるでしょう。お前が今対応していた女性が本当に山賊を討ったのであれば、領地の恩人に礼を失した態度をとったことになります」

ちょうど一方が僕の死角になる形で始まった問答の主は門番ともう一人。姿の見えぬ人物は声の質が女性のものにも少年のものにも聞こえ、性別の判断がつけづらいが。

（何だか複雑だよなあ）

門番の態度がそのまま領主の態度なら、領主を倒してこの周辺を支配下に置くと言うプランAを実行に移せば良いだけだったのに。

（この分だと融通の利かなかったのは門兵だけだったという展開もありそうだし）

戦女神側の僕としては褒賞なり何なりで金銭等が入った方が嬉しくはあるのだけれど、物わかりのいい領主だった場合『冥王』は力押しで問題を片づけられなくなるわけで。

「話しは私が通しておきます、案内の者をよこしますからお前はそれまで客人のお相手を——」

今はどうやら領主と面談できそうなことに安堵すべきか。

「申し訳ありませんでした、暫しこちらに」

態度を豹変させた門番にフィーナが誘導されて行く姿を横目で見つつ、僕は嘆息した。

「山賊を撃退してくれたこと、近隣を治める領主として感謝しよう。これは礼だ、受け取って欲しい」

謁見用と思われる部屋に通されたフィーナは挨拶もそこそこに領主から頭を下げられていた。

「あ、えつと……」

（つと、いけない!）

もともとただの侍女だったフィーナにとっては地方の領主といえど権力者に頭を下げられるという状況に免疫がない。

「フィーナ! 平常心、平常心」

慌てて僕は耳元で囁き、フィーナの身体を軽く揺さぶる。

「はっ、し、失礼しました……」

（ふう、こっちは持ち直したな。しかし……この人、どうも態度がおかしい。物わかりが良いと言うより――）

さっさと用件を終わらせ、有無を言わず厄介払いしてしまいたいという様な対応にも僕には見えた。

（まあ、謝礼の量を見る限り本当に感謝はしてくれているのだろうけど）

場に同席したもう一人の人物を領主が横目でちらちら見ていた事からすると、どうも訳ありくさい。

「では、これにてお引き取り頂きたい。門番も口にしていたかもしれないが私は多忙の」

だからこそ、領主は面会を早々に切り上げようとしたのだろう。

「私は、リアス・ウォルス。王位継承権第三位の王族にして――」  
「っ」

領主の思惑をぶちこわしたのは、名乗りを上げた同席者。声からすると門兵に取りなしてくれた人物でもある。

（ああ、そう言うことか）

門番も領主もおそらく、このリアスと名乗った人物の身を案じてあんな対応をしたのだろう。そして、この段階で彼が名乗りを上げたと言うことは。

「山賊を倒し村を守ったというお力を見込んで、お願いがあります」  
やはりと言うべきなのだろうか。つまり、領主側が何らかの問題を抱えていたせいで山賊達は好き勝手が出来ていたわけだ。

（厄介ごと……か、これは）

十中八九というか、これからされるであろうお願いは、周辺を荒らし回っていた山賊より重大な問題の筈なのだ、少なくともリ阿斯と隣の領主にとっては。

「身勝手は承知だが、どうかリ阿斯様のお話をきいてはくれまいか？」

（ここは、頷くしかないんだろうなあ）

斜め上の展開がもたらした衝撃から僕は透明化していることも忘れて頷き。

（って、会話の相手は僕じゃないか。フィーナ、フィーナ、しっかり……）

我に返って、僕以上の衝撃を受け固まっていたフィーナを再び揺さぶった。

（にしても、これは明日の面談どころじゃなくなってきたような）

予定はままならない。

「ふぁ、あ……は、はいっ」

ようやく現実に戻ってきたフィーナがコクコク頷く様を見て、僕は天井を仰いだ。



## 第十八話「地方領主」 (後書き)

想定外の王族登場。

そして、リアスと名乗った王族はフィーナに何を依頼するのか。

『冥王』は領主と面談することが出来るのか。

そんな感じで続きます。

## 第十九話「助力するか否か」

（テンプレ展開というか、何というか）

かいつまんで言うなら、リアスと名乗った王族の話とはお家に乗っ取った叔父とその一派を倒し、国を取り戻すのに手を貸して欲しいという話だった。

「敵国とよしみを通じ、祖国を裏切り、国土を売った叔父などもう叔父ではありません」

玉座の篡奪に成功したリアスの叔父は協力してくれた隣国へ謝礼として領土を割譲し、全権を掌握しようと抵抗していた国王派勢力を次々に撃破。かろうじて辺境に逃げ延びたリアスが国王派からすれば最後の希望と言うことらしい。

（いかし、これはフィーナの手に余るよなあ）

交渉の卓についているのは、もともと王族にはある種のアコガれを抱えている節のあるフィーナであって僕ではない。

「それに、割譲された領土に住んでいた民がどのような扱いを受けているかと思うと」

しかも、相手は情にも訴えようとしている――とは穿ちすぎた見方かもしれないが、ただ玉座と自分が大事なだけの頭が悪いダメ王族で無いことだけのようだ。民を思う口ぶりが己のエゴを押し隠す仮面であるという可能性も否定できないものの、こちらの場合取り繕うだけの知恵が回ると言うことでもある。

（ここで権力をかさにきて高圧的に出るとか、褒賞をちらつかせて釣ろう何て魂胆なら容赦なく叩きつぶせただろうけど）

僕からすれば、この要請はさっさと蹴り飛ばしたい。薄情者と言う無かれ、僕は戦いのない世界を作る為にこの地に降りたのだ。

（リアスが奪還した国を大きくして天下統一、争いはなくなりまして……って方法もあると言えばあるけど）

今のところ何処かの勢力に仕官したり影響力を持って、武で世界

を平らげるという方法をとる気はない。

（そもそも、平和を目指してるのに権力闘争に荷担するなんて矛盾してるよなあ）

第一、僕には一応主君が居るのだ。邪教集団に畑や家を焼かれ、ついてくると言った人々を預かって貰っている領主が。

（客将扱いとはいえ、一応所属してる以上、二君に仕えるのはな）

さっさと拠点を手に入れて、世話になっていた領主にも恩を利息付きで返し自由の身になりたいところだけれど、まずは眼前の問題だろう。

「フィーナ、ちょっと脇に寄ってくれる？」

「め、戦乙女様？」

「うん、ちょっと口を挟む」

フィーナの意外そうな声に頷くと、僕は幻影でエフェクトを作り出す。

「話は聞かせて貰ったよ」

虚空に突然出現した少女が、光で出来た翼を羽ばたかせながら降下し、床に着地する幻影。それに合わせて、僕は軽くジャンプし、着地と同時に透明化を解いた。

「「なっ」」

部屋にいたフィーナ以外の者が目を見張る中、僕は名乗る。

「ボクは戦乙女。彼女、フィーナの主にして——自称下級神？」

可愛らしく首を傾げる仕草は神族っぽくは無かったかも知れないが、ちょっとだけゴージャスにただけだというのに幻惑の力は凶悪だった。横に退いたフィーナが片膝をつき僕を敬う姿勢をとって居ることも効果はあったのだろう。

「神？」

「まさか、信じられ……だが、この光はっ」

今回はちょっとファンパツして纏った幻影へ僕を目にした者が神々しさと僅かなプレッシャーを感じるような付与効果を持たせてある。

だからこそ、目の前の二人は僕の言葉を半信半疑ながら受け入れた様だった。

「そ、それで……あなた様が降臨されたのは」

「うん。わかると思うけれど、さっきの話しについて。彼女をスカウトされちゃうとボクが困るんだよね。ホラ、フィーナはボクの……」

そこまで言った僕が言葉を途切れさせたのは、頬を染めたフィーナの期待を込めたまなざしと僕の視線が交差したからなのだが。

（その目何?! いや、期待してるのはわかるけど同性愛疑惑とかかけられるのはちょっと……というか、色々と、ねえ?）

とりあえず僕は人前では拙いと目で訴えた、訴えたつもりなのに。

「戦乙女様」

うつとりした表情で呼称を口にしないでと頼むのは無理なんだろうか。通じていなかった。

「あー、えっと。フィーナは僕のモノだった」

「戦乙女様あ」

「ちょ、わっ」

諦めて期待にそってみれば待っていたのは感極まったフィーナの抱擁で。幻影を身に纏っているとはいえ、中身は普通の男なのだ。左の腕を抱きしめられ二の腕に伝わる柔らかな感触は僕を一瞬テンパらせるには十分な威力を持っていた。

「ふい、フィーナ! 人前ッ、人前!」

「あ、あの……」

我に返らせようと叫ぶ僕に突き刺さる視線が痛い。

神の威厳なんてあったものじゃ無いだろうし、確実に誤解させたと思う。いきなりのミスだ。

（お、落ち着け。誤解は解けば良いんだ、無理なら口を塞げば良いだけのこと。目撃者は二人、大丈夫、殺ればでき……はっ）

パニックのあまり考えが不穏な方向に転がりかけた気もするが、そんなことは忘れよう。

（しかし、拙いなあ。断りにくくなった）

本当なら、叔父を一方的に非難するリアスに「一方的に非難すると言うことはそちらにも探られたくない腹があったってことだね」と指摘、キミの正義は信用できないし神として人の下風に立つ気も家来になる気もないと、と踵を返そうと思ったところだが。

（せめて冥王側ならもっと違う対応が出来たのに……せめて誤解は解かないと）

どうしてこうなった？ うん、冥王側？

「返事はあさってでも良い？」

「は、はい」

そうだ、先延ばしにして冥王側で力を貸そう。関わる気はなかったけれど仕方ない。

（冥王側でインパクトのある行動をとりまくる。そして、さっきのシーンをうやむやにする）

この時、僕は冷静さを欠いていたんだと思う。

「フィーナ、あとでお仕置きね？」

「えっ？」

ただ、ややこしい自体の引き金になった相手へ通告することだけは忘れなかった。

## 第十九話「助力するか否か」(後書き)

事態は予期せぬ方向へ。

知と知がぶつかり合う交渉の予定が、どうしてこんなことに

と言う訳で、続きます。

## 第二十話「夜会話」

（はぁ、疲れた……）

客将の身分で得た部屋に寝ころんで僕は天井を眺めていた。

「とりあえず、あれでしばらくはもつと思うけど」

同行を申し出た村民を預かって貰っている領主には有事になれば僕に命令を下す権利があるわけだが、呼び出されてはこちらの仕事が進まないので戦場になりそうな場所に幻影を設置することで外敵の侵入を防ぐ備えはしておいた。

（しかし、本当に反則的チートな力だったんだなあ）

今、僕の居る世界には魔法がある。だからここに赴いた当初は、大魔術師と言えば山一つ軽々吹っ飛ばす魔術師を想像したし、僕が外敵の侵入を阻む為に設置した一特定の侵入者を迷わせる幻影みえやのめいぎょうもせいぜい一時しのぎに使えばいい程度に思っていたのだ。

「冥王殿、それはこちらの人間を買いかぶりすぎじゃの」

そう、笑いながら話してくれた参謀リッチ殿によると、僕が思う様な魔法は人間には扱えないのだと言う。

「着弾の爆発に十数人巻き込める火球が放てれば人々はその者を大魔術師と呼ぶ筈じゃからの」

つまり、僕で感覚で中堅レベルの技量があれば既に並ぶ者なしの存在と言うことらしい。

「ワシとて魔導死霊リッチにならねば転移で運べるのは多くて五人、一日に使えるのもだいたい二回が限界だったはずじゃ」

「なるほど」

ちなみに魔術師は基本的に一系統の術を使えるレベルに昇華させるだけでも出来れば上等だそうで、三系統使えた参謀殿は、人間の時でさえチート扱いされていたとのこと。

「癒しの魔法にしても重症を治せる様なモノが使えれば、伝説級。

冥王殿が戦場で見せたあれなど神話級の魔法になるじゃろうな」

「え、じゃああれって拙かったですか？」

「いやいや、死に行く者を見捨てておけぬと言うお前さんの行為を責めたり詰ることなどできぬよ。第一、神話級の魔法が行使されたなどと言ってもほら吹き扱いされるのがオチじゃ」

参謀殿はそう言ってくれたものの、やはり早まったかなと思う僕だった。明日をも知れぬ病人や怪我人を身内に持つ人達が、そのほらを一縷の望みに殺到してきたら。

（僕は家族を助けて欲しいという人達をすげなくあしらえるだろうか？）

山賊を皆殺しにしたのも、山賊に囚われていた村人達を「戯れに飼う」と非人道的な名目で保護したのも、他者から『利用される』のを避けるべく、人から恐れられる為なのだが、いくら恐ろしくても瀕死の人間をあつまり助けられる様な人物が居るとしたら――。

（悪逆非道に走るか。とはいえ罪のない人を手にかけるわけにはいかないし）

基本的に僕が『冥王』として行う行動は偽悪的なものに限定されてしまう。

（飢饉で税も払えない村を襲って壊滅させたことにして村人を保護するとか、奴隷商人を襲って奴隷ごと皆殺しにしたことにして奴隷達を保護するとか……って、今人が増えても先立つものが）

ならいっそのこと悪徳商人を襲って金品を奪うのも良いか。

「冥王殿？」

「あ、すみません。ちょっと犯罪計画を」

参謀殿に声をかけられ我に返った僕は苦笑を浮かべつつベッドから起きあがる。

「まあお前さんのことじゃから悪事に見せかけた善行なのじゃろうが」

「そういえば、前に善行を積めるとか言っていましたよね？ あれってどういう」



問いを発したのは、以前参謀殿が口にした事を思い出したから。  
「うむ、あれか。あれはワシが生前——まだ若く、未熟な魔術師見習いだった頃じゃった」

「ワシは魔術師見習いとしては落ちこぼれでな。適正は複数の系統に跨って存在するという類い希な潜在能力を持っておりながら実力が伸び悩んでおった」

その結果、一人目の師からは見込みなしと放逐され、別系統の師に教えを請うたがこちらも魔法が上手く使える様にならず、絶望しかけていたと参謀殿は語る。

「ワシに適正のあった三つ目の系統が転移魔法じゃったが、これは使える魔術師自体が少なくての。師になる者も居らねば、関連した書物も殆どなかったんじゃ」

そもそも当時の魔術師達は一般の人々から「得体の知れないもの」として恐れられると同時に忌み嫌われていたらしい。

「ワシはその魔術師の見習いでおまけに出来損ないじゃったからな。周囲の目も冷たく、相手にしてくれる者など居らんかったのじゃよ。一人を除いて」

「その一人というのは？」

「オフィーリア。ワシより一つ上の女子でな、若くして神官として神殿に勤め誰からも好かれる少女じゃった」

彼女は魔術師にも偏見が無く、魔法が上手く使えないと落ち込む参謀殿を励まし元気づけてくれる存在だった、とのこと。

「オフィーリアは、ワシの魔術や魔法も使い方によっては人を助けたり幸せに出来る力なんですよと言った」

事実、力は使い方次第で善にも悪にもなるものだ。

「ワシはその言葉に勇気づけられてな。悩んだあげく修行を今までたいした修練をしたこともない転移魔法の系統に絞り、少ない書物を読み解き、独学で転移魔法を編み出すことに成功したのじゃ」

転移魔法に絞ったのは、使える魔法の系統の中でもっとも可能性を秘めていたからじゃと参謀殿は言った。

「転移魔法の使える様になったワシは、一刻を争う状況の病人や怪我人を医者元まで運び、逆に病人や怪我人の元に薬を届けた」

オフィーリアの言う様に人を助け始めると参謀殿を見る周囲の人々の態度が一変したという。

「まるで掌を返したようにな。じゃが、ワシはワシじゃ。まあ、オフィーリアが居なければどうなっておったかわからぬがの」

オフィーリアはワシに編み出した魔法の危険性を説き、ワシが天狗になりそうになった時は叱って諭した――参謀殿がオフィーリアのことを語る顔は何処か誇らしげで、嬉しそうで、そして少しだけ寂しそうに僕には見えた。

「オフィーリアはワシにとってかけがえのない人じゃった」

そして、参謀殿が大魔術師と呼ばれる様になって数年後のことへと話は移り。

「ワシはオフィーリアに言ったんじゃよ。神官をやめてワシと一緒にしてくれんかと」

ここで何らかの反応をするのは無粋だと思った僕は、黙って参謀殿の話に耳を傾けていた。

「オフィーリアは一つの条件を出した『自分がこの先神様にお仕えて施したであろう善行を代わりにしてくれるのなら』とな」

「なるほど、それで参謀殿は今も善行を――」

「そう言う事じゃ。じゃが、人の一生は短い。ワシはオフィーリアの分だけでなくワシをオフィーリアに引き合わせてくれた感謝分も上乘せして神様に返そうと」

「魔導死霊になって死しても善行を施す方法を模索したんですか」

「左様」

何と言っているのかわからないが、余程オフィーリアさんを大切に思っていたのだろう。

「ひょっとして、だから僕に協力してくれてるんですか？」

「それもあるが、約束は約束。お前さんに協力すれば善行を積み重ねても良いという訳にはいかんしの」

よくよく考えて見れば、感謝する相手が神なら僕に乱世を収める様依頼した神々の中に該当する神が居た可能性は高い。と言うか、参謀殿もアンデッド作成の解説チュートリアルよろしく神々の世界で魔導死霊として蘇らせた筈。ひょっとしたらこの世界に旅立つ姿を見ていたかも知れないのだ。

（ここで僕がオラクル使って中継代しつつ参謀殿と会話させてあげると言うのは無粋かなあ）

それどころか、おそらく亡くなっているであろうオフィーリアさんを生き返らせるなり転生させるなりして連れてくることも、授けられた力を使えば不可能ではないと思う。

（こういう時、反則的な力があると困りものだ）

つい考えが傲慢になる。ここまで打ち明けてくれたのだ、本当に再会を望むなら参謀殿は僕に頼むだろう。だいたい、心残りがあろうな死者ならともかく、安らかに眠っている者の眠りを妨げるほど僕は無粋では無いつもりなのだから。

「すみません、プライベートなこと聞いたりして」

「構わぬよ。今のワシがあるのは冥王殿のおかげじゃからな」

参謀殿に謝った僕は恐縮しつつも一つ頼み事をする。

「それで、出来たらフィーナを呼んできて貰えますか？」

おしおきは、忘れぬうちに、だ。

## 第二十話「夜会話」(後書き)

今明かされる参謀殿の過去。

そして、フィーナを待つのはいったいどんな「おしおき」なのか。  
ぶっちゃけ作者、まだどんなおしおきにするか決めてないです。

おしおき考えつつ、続きます。

## 第二十一話「おしおき（多分前編）」

（と、フィーナを呼んで貰ったけどどうしようなあ）

事態をややこしくした責任はあるが、そもそもフィーナがあんなキャラになってしまったのはある意味僕のせいなのだ。

「戦乙女、か」

乙女とはつまり一角獣に乗れたり触れたりする様な女性を指す。

ぶっちゃけ『戦乙女』と言うネーミングは死者の魂を導くと言うイメージから深く考えずにつけてしまったものなのだが、フィーナに戦乙女であり続けて貰うと言うことは、この先も清い交際のみのおつきあいで行こうと言うことでもある。

（そう言えば、昔やってたゲームの知り合いに居たなあ、結婚して称号変更した人が）

その人がゲームで使っていたキャラクターの称号も最初は戦乙女だったのだが、結婚を機に戦女神と称号を変更したのだ。

彼女が称号を変更した日。

「乙女とは処女と言うことだろう？ 私は子供も欲しいし、いつまでも乙女を名乗っては詐欺になる。第一、嘘は好きじゃない」

「いや、間違っちゃいないと言えば間違っちゃいないけど、このタイミングで称号変更って生々しいというか。旦那さん、貴方のせいで弄られまくってますよ？」

などと会話を交わしたのを僕は覚えている。

「あーあ、ついに我らが戦乙女様も他人様のもんか」

「つーか、称号変わってるって事は、あれだろ？ あれなんだろう？」

称号変更の理由を察した友人達から冷やかされながらも、彼女の夫であるキャラクターは照れくさそうに笑っていた。

（あの時は僕も恋人欲しかったんだけどなあ）

巡り巡ってゲームじゃなくリアルで『戦乙女』の称号に振り回されるとは思わなかった。

（多分、フィーナがプッシュしてくるのも僕が受け止めてあげられないのが原因だろうし）

軽率な発言と誤解から生まれた関係だが、僕はフィーナと出会えたことを後悔していない。

（一人の人生を歪めてしまった。だから償うとか責任をとるって言うのは失礼なことかもしれない。けど、僕は——今の僕は、それすら出来ないんだ）

今、フィーナに手を出したら。

（ダメだ！　ダメだ！　歴史上、女性の色香に溺れて破滅していった英雄や王を僕は何人も知っている）

自分が意志の弱い人間であることも。

（だいたい戦乱を終息させるさせるには僕とフィーナだけじゃ明らかに人手が足りない。これからフィーナの様に僕を補佐してくれる『戦乙女』を新たに加えるかも知れないのに、最初の一人に、しかも殆ど成果も出せてない状態で手を出すなんて——）

卑怯者だと思う。

『戦乙女』という言葉の意味を盾にして、自分の懦弱さを言い訳にして、一人の少女が向ける想いを真っ向から受け止めることを恐れているのかもしれない。

「めい、戦乙女様？」

「っ！」

それからどれほど時間が経ったのか、わからない。モヤモヤしたものを抱えたまま寝ころんでいた僕を我に返らせたのは、扉をノックするフィーナの声だった。

「あ……うん、いいよ。入って」

「あ、ふあ……は、はい。し、失礼します」

先ほどまでフィーナのことを考えていたこともあってはつきりし

ない返事になった僕だったが、答えるフィーナの声も平静とは言い  
がたいものに聞こえる。

おしおきなどと言ったから萎縮しているのかもしれない。

「あ、あの……」

感情の乱れからか犬耳が隠しきれず、何かを訴えるような潤んだ  
瞳と相まって、僕には叱られて縮こまる子犬の様に見えた。

（僕にこれをどうしろと？）

やりづらいつたらない。そもそも、こんな顔をした少女に何かし  
ようものならどう考えても僕が悪者だ。

（うん？ なにかしようもの？）

そもそも、何故気づかなかったのだろう。

「あの、戦乙女様。今日は本当にもうしわけなく——ど、どんな処  
罰でも甘んじて受け入れるつもりです、ですから……その」

（つて、ああ！ 『おしおき』について具体的に考えてなかったあ  
あ！）

フィーナに言い出されるまで、どんなおしおきをするかが白紙  
だったことに。

「あ、えーと、ふい、フィーナはどんな『おしおき』されたい？」  
テンパって居たとは言え、こんな質問をしてしまった僕は色々ダ  
メだったと思う。

後になって思い切り殴ってやりたいと何度も思ったものだ。

（つて、まるつきり変態の台詞になってるううう！）

僕はフィーナと数回会話することに一回は大ボカやらかして黒歴  
史を作っている気がする。

せめてものの救いは、この場に僕とフィーナしか居ないことだろう。  
（いつか、乱世を終わらせることが出来たら——これも笑い話に）  
なって欲しかった。せつに、せつなに。

「わ、私のされたいお仕置き？ あ、その……あの、えっと」

頬を赤らめないで欲しい、モジモジしないで欲しい、困らないで  
欲しい、それで居てちょっと期待する様な目で見ないで欲しい。

（助けて……へ、ヘルプ！）  
僕はやりきれなさで逃げ出したい気持ちで一杯だった。



**第二十一話「おしおき（多分前編）」（後書き）**

なんだかんだでおしおきはまさかの次回持ち越し。

主人公、フィーナの前では馬鹿になるなあとしみじみ。

続きます

## 第二十二話「おしおき（多分後編）」

（これで、良かったんだろうか）

僕は、寝台に横になったまま考える。

「戦乙女様？」

横を見れば息の届きそうな場所にフィーナの顔があって、僕はフィーナの声にちょっと引きつり気味の微笑を返した。

僕とフィーナは同じベッドに寝ている。だが、さっきまでの躊躇や苦悩は何だったのかと言われればはっきりと答えられるだろう、手を出した訳ではないと。

「あ、あの……何故、戦乙女様はご自分をお縛りになったのですか？」

と言うか、後ろ手に手を縛られた状態で一体何ができるというのか。

「ちょ、ちょっとした精神修行かな」

どんな修行だ、とかツツコまないで欲しい。一応これも自分に課した罰なのだ。自制心を養う為にギリギリの場所に身を置きつつ、理性のたがが外れた場合のことを考えて自分で自分を拘束した。

「そ、それよりフィーナこそ大丈夫？」

「ふえ、あ、だ、大丈夫です」

ちなみに、フィーナの暴走で逆に襲われることも念のために考慮して、フィーナには手足の自由を奪う暗黒神聖魔法がかけてある。

「そ、そう。……あっ」

お互い体が自由にならないのだ。これなら間違いは起きないだろうと思ったのだが、ひょっとしてこの状況、かなり変態っぽいのではないだろうか。

（しまったああっ！）

気づけば、ものすごい勢いで墓穴を掘っている自分が居た。

（そもそもこれってどっちかが寝てしまってもう一方がトイレ行きたくなったら……いや、起こせば良いんだろうけど）

そもそも僕は寝起きが良かっただろうか。

（早まった……とはいうものの余裕なくてこれがお仕置きって言っちゃった後に取り消しって言うのもなあ）

そうだ、徹夜をしよう。徹夜をすれば問題はないんじゃないだろうか。

（って、その場合僕がトイレに行きたくなったら――）

ダメだ、詰んだ気がする。

（いや、パニックになっちゃ駄目だ、落ち着け。第一、ここまでの墓穴を掘ったのも取り乱してじっくり考えず行動したことが原因なのだから）

今回は落ち着いてじっくりと打開策を練ろう、と決めた僕の胸には。

「……戦乙女様あ」

顔を埋める様にして寝息をたてるフィーナの姿が。

（状況、悪化した……）

しかも心なしか少し幸せそうな顔で非常に起こしづらい。

（何だろう、これ？ 何かの罰ゲー……ああ、罰だったっけ）

人によってはご褒美かも知れないが、少なくとも僕にとっては結構なピンチだと思う。

これで朝が来て、フィーナが起きるより早くメイドさんとかが部屋に入ってきて縛られた僕がフィーナと一緒に寝てるところでも見られた日には、絶対変な誤解をされる。

（そう言えば部屋のドアってカギをかけたっけ？ フィーナを招き入れた時はカギ開いてたよなあ）

外出してからガスの元栓切り忘れたかが気になるのと同じような不安が僕の胸を過ぎった。

もっとも、過ぎったところで縛られてる状況でなおかつ灯りを消した後では確認しづらい。

（気になる……が、今は忘れよう。寝られないなら寝られないなりに冥王として昨日の二人へどう接するかでも考えておこう）  
リアス達

僕がこの世界にいるのは乱世を治める為なのだ。時間はあるだけ有益に使うべきなのだ。決して現実逃避している訳ではない。

（冥王から見れば、国を奪われた王族に荷担するメリットもそれなりにあるんだよね）

王座の奪還に成功すればと言う『取らぬ狸の皮算用』ではあるものの、現在冥王が占拠してる城塞の所有権や資金、物資など欲しいものはあるのだ。

（奪還までに活躍できれば発言権もある程度手にはいるだろうし）  
うまく国の舵がとれれば、後に打てる手が増えるかも知れない。  
（何より、戦争すると言うことは死人が出るだろうから）

人が死ぬことを喜べるほどおかしい精神構造はしていないつもりだが、死者を自分の陣営に加えることのできるネクロマンサーからすれば戦力確保の好機であることは覆しようのない事実なのだ。

（そりゃ、死人はできるだけ少ない方が良いけど）

なまじネクロマンサーの力なんて持っているとこういう時に複雑なのだ。

（それともう一つ、リアス達に『冥王』の能力をどれだけ打ち明けられるかもな）

常識的に考えれば、死体を操って手駒にするような奴とつるんでるのはたいてい悪役だろう。

（「そんな邪悪な力を持った奴とくつわを並べられるか。俺達は自分達だけでやらせてもらう」とか向こう側に突っぱねられたら話にならないからなあ）

この場合、敵側について足を引っ張りリアス達を勝たせるという方法もあるかも知れないが。

リアスのおじ  
（「お家に乗っ取った叔父とその一派」側にも「そんな邪悪な奴いらん」と言われる可能性が残ってるし）

問題は、どこまで想定して対策を練っておくか、だろう。

（こういう時歴史物の文官や軍師ってつくづく凄い人だったって実感するよなあ）

僕も一人ではなく参謀殿が居り、フィーナや他の仲間もいるものの、フィーナは寝ているしこの状況下で参謀殿を呼ぶのは避けたい。（参謀殿なら話せばわかってくれると思うけど、こんな姿は流石に人に見せられない）

よって僕は眠れない夜を、何とも言い難い気持ちで過ごした。

「うん、戦乙女様あ」

「っ！」

フィーナの独り言に時折過剰反応して身を固くし。

（っ、妙な姿勢で寝たから腕が痺れて……）

体を縛った状態で寝たことへの副産物と身を振ったりして戦いながら、ただ時が来るのを待つ――。

幻影魔法で誤魔化せば良いんじゃないかと思いついたのは夜が明けてからだだった。

## 第二十二話「おしおき（多分後編）」（後書き）

考えに考えたおしおきは色々と酷いモノになりました。

次回、多分冥王パート。

果たしてリアス達の反応は、いかに？

続きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5322s/>

---

ネクロマンサー奔走記

2011年11月25日04時48分発行